

---

# 吟於霄

智郷樹華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

吟於霄

### 【Nコード】

N7372W

### 【作者名】

智郷樹華

### 【あらすじ】

主人公・在原 雅史は幼い頃に母を亡くした白皙の少年。青年と少年の狭間を漂う頃、雅史は恋に墜ちる。閉塞的な世界で育った彼の恋は。果たして甘く切ないものとなるのか、それとも……

時代設定としては大正から昭和初期頃です。旧家のお坊ちゃん的な主人公が初恋を経験していく話……のハズ。

蝉櫛ノ節 (一)

まるで蛇のようだ。

木上から地上を見下げて獲物を狙い、鋭い眼光を駆使して内側から支配する。

狡猾で、残忍で、非情さを持つ生物。滑りを帯びた皮膚をくねらせた姿勢は、恐怖にまさる美しさを携えて、見る眼を引く。

ただそれが、人間の體かたを持ち得ている。

そして自身と同じ血脈の、「父」という肩書きを持っている。それだけだ。

朝食の席で隣に座る女 妻と絶えず言葉を交わしている男を見ながら、末席に座る少年は思う。

肉厚で脂ののった腹を恥ずかし気もなく衿の間から突き出し、箸よりも左手に持つ杯ばかり口に運ぶ男。脇息に肘を掛けて焼き魚をつつく様は、御世辞にも、行儀の良いものとは言い難い。

それでもこの男は、家長だ。

即ち、本をただせば公卿・大名家の血筋を引く在原家サハラの、現当主である。そして紛れも無く、少年の実父でもあった。

在原 雅史タカシ。在原家五男・末子の彼は、白皙の肌に端正な風貌を持つ少年である。

一見すれば少女とも見紛う程の、ひどく線の細い印象は病床の幼少期を過ごしたためである。加えて、母親譲りの顔立ちが彼の繊細な雰囲気を作り上げていた。今でこそ少年らしさがあるものの、未だに兄たちからは可愛がられる対象となっている。しかし、それは自分に向けられたものでは無いと、当の雅史は思っていた。

それというのも、先年、別宅で療養中であつた妹が遂にその短い生涯を閉じたためである。

名はミノリ。在原家の長女であつた彼女は、雅史と年齢も近かつ

た。

会ったのは数える程度でしかないものの、同じ境遇の幼い妹が夭逝した事実は雅史の心に衝撃を与えた。同時に、ある思いも芽生えさせたのであった。

けれど他の兄弟、在原家次男を筆頭とした三人の兄たちは、妹の死を悲しみこそすれ、一日として一緒に暮らしたことの無い彼女を長く偲び続けることは無かった。

だからというのか、彼らはミノリを追うようにこの世を去った母（兄弟の内とは誰とも血の繋がりの無い女）を、憐れみはしても、葬儀の折には冷静な対応を見せた。

形式上では母親であった女性でも、全くの赤の他人に違いない。そういう認識だった。

そしてそれは、新たな後妻に対しても、同じであった。

在原 若葉。現・在原夫人は六番目の妻である。

見目麗しく、物静かな女性だ。常に穏やかな笑みをたたえ、可憐な容姿にあどけない表情を浮かべている。そして事実、彼女は在原家長男よりも歳が若かった。

つまり雅史の父は、自分の娘とも言える女を嫁に迎えたのである。

「雅史さん、もう宜しいの？」

箸を置いて席を立とうとしたところへ、鈴が転がる様な甘い声音が響いた。向けば、母親と呼ぶには若過ぎる顔にこちらを窺う表情があった。

「ごちそうさまでした」

小さく言って、雅史は部屋を出た。

後ろ手に障子を閉め、平静を装いながら足早に自室へ向かう。

板張りの外廊下を抜け、中庭に面した渡り廊下を行くと、雅史に宛がわれた離れが見えてくる。

自室に転がり込むと、初めて自分が呼吸を止めていたことに気付いた。

二度、三度と深く息を吸い込み、呼吸を整える。微かに震える指先を見て、雅史は眉根を寄せた。

雅史さん。

新しい母は、自分のことをそう呼ぶ。

彼女はこれまでの母より数段若く、物腰が柔らかかで、温かい。

肩口をさらりと流れる黒髪は光を抱き、彼女が動く度にほのかな香りを放つ。

穏やかな女性らしく、静かな足取りで屋敷内を回り、午後には縁側で読書するのが習慣になっている。家のことは係りの者がするし、彼女の仕事といえば、主人である父の相手をするこぐらいいからだろう。忙しく動いている様相を目にしたことがない。

傍から見れば贅沢な暮らし振りだが、若い盛りの当人にとっては、退屈に他ならないだろう。まして、いくら奥方という地位であっても、新参者では生活も楽ではない筈だ。

それでも彼女は母親として一所懸命に、家人たちに認められようと日々努めていた。呼び方もその一つだ。

言葉にすれば余所余所しいが、口調がそれを和らげて、親しみを感じさせる。馴れ馴れしいものよりは、余程マシだ。

先の母となつた一人は、兄弟全員を愛称で呼ぼうとしたところ、三番目の兄から反感を買つたらしい。この話は雅史が生まれる以前のこと、本人から教えて貰つたものだ。

在原家の兄弟は、母親が異なるとも皆仲が良かった。

そして一様に、雅史に優しかった。

顔立ちは似ておらず、性格も内省的で身体も弱い。それでも彼らは兄弟の一員として雅史に接してくれていた。病床に臥せていた頃も、兄たちは毎日のように訪れ、色々な話を聞かせてくれた。人と接する機会の少なかった幼少期を経て、兄たちには何でも話せる。雅史は心から、彼らを尊敬していた。

畳の上に転がっていた雅史は、窓辺から差し込む陽光を眩しそう

に見上げ、そして身を起こす。

美しい後妻にまだ慣れずにいる気持ちを抑え、もう一度大きく息を吸って、部屋を出た。

向かった先は母屋を挟んで反対側にある射場。自家用のこぢんまりとした造りだが、精神を落ち着かせるには十分な場所だった。

袴姿に身形を整え、礼を経て、的に向かう。略式の所作手順ではあるが、雅史に弓道の心を教えたのは次兄である。外に出ることの出来ない雅史でも、身体を動かせるならば、と言って、手解きをした。

この射場自身は昔からあったようで、使われていなかったのを、兄たちが一種の遊び場として再開したのだそうだ。しかし今では、雅史のみが使用している。

「お見事」

幾筋目かの矢を放ち、その矢が的に当たったところで、背後から声が聞こえた。

振り返ると其処には、自分の主治医である嶋田<sup>シマダ</sup> 紗霧<sup>サギリ</sup>の姿があった。

「検診のお時間です。部屋にお戻り頂きたい」

紗霧は、微笑みながら言った。

眼鏡の奥で光るその眼が「もう十分だろう」と言っている。

切れ長で秀麗なその目は、いつも雅史の心を見抜くように見つめてくる。そして今も確かに、雅史の気持ちは落ち着いていた。

一息吐いて肩の力を抜くと、弓を片付け、雅史は紗霧と共に自室へ帰った。

「体の方は、調子が良いみたいですね」

検診が済むと、机に向かつてペンを走らせながら紗霧は言った。

着衣の衿を引きながら、雅史は黙ってそれを聞く。どうせいつも通りのことだろうと、右から左へと流した。

紗霧は、数十代続く名門医家の娘である。淡泊な人柄で、いつも

冷静な対応をする。

顔立ちは、長い髪と眼鏡で隠しているが、凜とした芯のある美しい表情を見せた。前任者とは大違いの対応だ。

以前の主治医は老齢で癖のある人物だった。診察時の態度もそうだが、やたらと注射をする。採血、栄養剤の投与、その他様々な理由をつけては、検診の度に雅史の腕に針を刺した。

その後、妹の発病を機に医師が替わると、雅史は、やっとあの注射地獄から解放されると、心から安堵したものだ。

そしてやって来たのが、紗霧だった。

しばらくは先の医師が二人を診ていたのだが、年齢を理由に、長兄が父に掛け合ったらしい。

自分の知り合いに、優秀な医者がいる。そう言って、自身と同じ医大生だった紗霧を紹介した。

「兄は、元気ですか？」

不意に雅史が口になると、紗霧は手を止めた。

「在原は、相変わらずのようですよ。伝言があるのでしたら、お伝えしましょうか？」

「いえ、そういう訳ではありません」

柔らかく微笑まれ、雅史は顔を逸らした。いつまでも、自立できない弟だと思われては、兄に迷惑が掛かるだろう。微かに眉根を寄せて、自分の言葉を後悔した。

「在原は、よく君のことを聞きますよ。まだ、家に帰る気にはなっていないようですね」

まるで、自分の心を察したような紗霧の口振りはいつものことだったが、今日は素直な気持ちで受け止めることができた。加えて、雅史の気持ちは温かくなっていた。

兄が自分のことを気遣っているということが、嬉しかったのだ。そんな雅史の様子を横目に、紗霧は小さく笑いを漏らした。

「体調も安定しているようですから、今日のところはこれで終わりです。どうぞ、射場でも、読書でもなさって下さい」

紗霧からの許しを得て、雅史は小さな声で挨拶をすると、着替えるために奥へ下がった。

やはり今日も、外出は許されなかった。

そう思いながら、雅史は袴の紐を解く。微かな苛立ちを覚えながら、乱暴に脱いだ衣類を放り投げると、どさりと畳の上に腰を下ろす。窓枠に肘を掛け、庭先に目をやると、輝石を散りばめたように光る池の姿が見えた。

じっとそれを見ているとまるで、閉じ込められた一片の空が、ゆらゆらと漂っているように思えた。



蝉櫛ノ節 (二)

それから数日後のある日、雅史が自室で書物を開いていると、母が訪ねてきた。

同じ屋敷内で暮らしていながらその言い方はおかしな気もするが、母屋から離れに来ることは、特に母に関しては、別の家に出向くようなものだ。

事実、彼女が直接、雅史の部屋へ来たのは初めてのことだった。

「雅史さん、いらつしやる？」

「はい」

驚きに雅史が顔を上げると、入り口の障子戸に母の影が映っていた。

いつも通り、和装に身を包んだ彼女の姿は、色の淡いものでも鮮やかに見える。

「少し、宜しいかしら」

そう言われて、雅史が障子を開くと、母は小首を傾げてにっこりと微笑んだ。

「ちよつとそこまで、ご一緒にお散歩でもいかがかしら」

思い掛けない外出の誘いに、雅史は一瞬戸惑った。

それでも彼女の花卉のような笑みに釣られて、小さく微笑んだ雅史は、諾と応えた。

「雅史さん。こんなに好いお天気なのに、家の中でじっとしているなんて、勿体ないでしょう？」

振り返った若葉は楽しそうに、年相応というよりも幼さを纏って笑っていた。

くるくると日傘を回し、幼子のように着物の裾を翻して歩く。時折覗く白い足首から視線を逸らし、雅史は空を仰いだ。

青々とした天空は、網膜を焼くように貫き、感情を抑え込む。息

を吸い込み、肺に空気を送ると、胸中から冷えていくのが分かった。母に付いて向かった先は、屋敷の側を流れる溪流の川岸だった。

雅史が水面の乱反射に目を細めていると、母は軽やかに石を飛び越え、岩の上に腰を下ろした。

下駄を脇に揃え置き、川水に素足を浸すと、立ち止まっていた雅史を呼んだ。

「雅史さん。こちらへいらっしやいな。冷たくて気持ち良いわよ」  
無邪気な彼女の微笑みに、雅史の胸は一度、高鳴った。

しなやかな線を描く白い脚を膝まで捲った裾から伸ばし、汗ばんだ肌に風を送るように胸元を緩め、いつもさりと揺れる黒髪を後ろに結び上げて白いうなじを露わにしている。

その姿に、雅史はどきりとした。

頭上から注がれる熱を一身に受けながら、雅史は俯き加減で岩の傍まで行き、腰を下ろした。

風上から流れる花の香に目を伏せ、岩肌に背を預ける。時折頬を掠める川からの冷気が心地良い。

燦燦と輝く陽光に照らされ、上気していく身体は熱の放出を求めて天を仰いだ。

とそこへ、不意に日差しが陰り、雅史はうつすらと目を開けた。

すると目の前には白い天蓋。薄くなった陽光に、顔を母に向けると、「お使いなさい」

愛でるような柔らかい微笑みと共に、そつと日傘の柄を手渡された。

しかしいくら雅史でも、女物の日傘を差して平然とはしてられない。返そつと立ち上がったところ、急に身を起こしたものだから、血の気が引いて眩暈を覚え、ふらりと体勢を崩した。

雅史は反射的に腕を伸ばしたが、その身をふわりと包む腕があった。

細くたおやかな腕に支えられて、再び鼓動が騒ぎ出す。

直ぐに体を離すと、彼女の顔には気遣う表情があった。その時雅

史は、自分が思っているよりもずっと、青白い顔をしていたのである。

若葉の心配を知らない雅史は小さな声で謝り、日傘を差し出す。不思議そうに見返してくる母から視線を外し、柄から手を離そうとした刹那、左手の指先に鋭い痛みが走った。

どうやら持ち手の籐の切れ端に引つ掛けてしまったらしい。見ると中指の腹に鮮やかな血が、珠のように付いていた。

雅史が気付くが早いのか、左手に影が掛かり、次の瞬間、指先から温もりが広がった。

っ！

雅史は刮目し、頭の中が真っ白になる。

自分の指先に触れているのが、母の　若葉の唇だと理解するのは時間が掛かった。

至極当然の如く口内に含まれ、傷口を消毒するように舌が触れ、血を吸われる。

ぞくりとするような感覚が全身を伝い、雅史は目を眇める。言葉になら無い、疼きに似た刺激に戸惑い、立ち竦んでいた。

「深くはないようだけど、帰ったら消毒しましょうね」

雅史の左手に手を添えながら、若葉は傷口を診た。その手から逃れるように、雅史は腕を引いた。

「…ありがとうございます。すみませんが、少し気分が悪いので、僕はこれで失礼します」

それだけ口にして、雅史は踵を返した。

背中に声が掛けられるが、振り返ることはできない。痺れるような感覚に、困惑と恥ずかしさを覚えながら雅史は駆けた。

今の自分を、決して人に見られたくない。

どんなに否定しようとも、雅史の脳裏には先刻の場面が色濃く残っている。

鮮やかな彼女の緋色が、感触が、温もりが。それを思い出そうとしている自分が、卑劣で汚い人間のようで嫌悪した。

この全ての想いを払拭したくて、どんなに苦しくとも雅史は走り続けた。

屋敷に着くと、雅史は脇目も振らずに自室へ駆け込んだ。

鼓動が激しいのは、走った所為だ。頬が紅潮しているのは、暑さに体温が上昇しているだけだ。雅史は自分にそう言い聞かせる。胸が苦しいのも、ひどく身体が疼くのも、単に急激な運動に驚いているだけだと、何度も何度も言い聞かせた。

しかし、想いは動かない。脳裏に焼きついた彼女の姿に心が騒ぎ立てている。これではまるで

「雅史さん、大丈夫？ 嶋田先生を呼びみましょうか？」

不意に響いた声に、雅史の胸は再びドクンと脈打った。

自分を心配して追って来たのである。その人の声に、邪な感情を呼び起こされる。震えが、足元から駆け上がった。

「……、大丈夫です」

そう返すのがやっとだった。どうかこのまま立ち去って欲しいと、雅史は思う。

鏡を見なくともどんな姿をしているのか分かる。障子戸から離れ、壁に追い詰められた格好でいる自分の表情が、どんなものであるのか、想像には容易い。だから、このまま引き返してくれ。そう願った。

雅史の祈りが通じたのか、母は心残りのある様子を声に含ませながら、短く応えて静かな足取りで帰って行った。

影が消え、足音が遠ざかると、雅史は安堵の溜息を吐いた。

く 蝉 櫛 ノ 節 く (三) (前書き)

今回は話の都合上、若干長めになっております。

蝉櫛ノ節 (三)

その日を境に、雅史は射場へ一日に向かう回数が増えた。

こんな時には、自分の身の置かれた状況が良かったと思う。雅史は病弱を理由に、他の同年代の者たちとは違い、自宅学習の形を取っていたのである。それは父が決めたことでもあった。

つまり、雅史は屋敷の外に出ることがめつたに無かつたのである。特別な外出用件が無ければ、敷地内からは出ない。それが、幼少期から続く雅史の生活であつた。

だがこの生活は、彼女 雅史の胸中を騒がせる人物にも言えることだつた。

在原家に入った彼女も、一日を屋敷内で過ごす。それは僅かながら、雅史を悩ませていた。

自室を出れば顔を合わせて当然。食事時など会わずにいることは不可能だ。それゆえに、雅史の懊惱が晴れることはなかつた。

そんなある日の晩、雅史はふと目を覚ました。体を包む微かな火照りと気だるさ、そして喉の渴きを覚えて、身を起こした。

水を飲みがてら夜風にでも当たろうと、寢室を出る。

障子戸をあけると、涼しい空気が室内に流れ込んだ。

雅史は半分だけ開けたまま、廊下に出た。

母屋へ向かい台所で水を口にした帰り、雅史の耳に、聞き慣れない音が聞こえた。

一瞬だけのそれに、聞き違いかとも思ったが、廊下に出るとそれが声だと判つた。

耳に残る異様な色を含んだ声音に、雅史は足を止める。

聞き覚えがある。だがどこで聞いたのか、誰のものなのか判らない。

記憶にある誰かの、声。それは確かだ。

何故判らないのか。それは微かな音でしかないからだろう。

木の葉のざわめきに紛れる程の、儂い音だからだ。

しかし、どうも躰をざわつかせる。耳から脳へ、脳から脊髄へと伝わり、芯を焦がす。

疑念への探究心と、奇妙な好奇心とが、心を沸き立たせる。そして惹かれるままに、雅史の足は方向を変えた。

足音を忍ばせ、耳を澄まし、着実に音源へ近付いていく。

冷えた夜風は、上気する雅史にとっては心地良く、確かに目的の場所へと導いた。

ピタリと、板廊下の続く一角で、雅史の歩みが止まった。

声が、聞こえる。

掠れて、吐息を含み、時折漏れる甘い響き。切れ切れに生まれては空気を伝って身体を包む、魔性の音。

その音 声が発せられている一室に、雅史の眼は釘付けになった。仄明かりの中で揺らめく二つの影。重なり合い、単調な衣擦れの音を奏でて蠢く物体。それを目にした瞬間、雅史の脳裏に言葉が浮かぶ。

この部屋の主は誰か。母屋の最奥。屋敷内の通が集約される場所。この部屋で過ごせる者は誰か

そこで雅史の思考は止まった。否、止められた。

感極まった、甲高い声が、雅史の芯を鷲掴みにしたのだ。

ぞわりと全身の毛が逆立ち、雅史は鞭打たれたように駆け出していた。

一刻も早く、この場所から離れたい。身を苛む空気から逃れたい。音の聞こえない所へ。声の届かない所へ。一刻も早く。

それらの思いが雅史を突き動かしていた。そして一心に廊下を駆け抜け、指先に触れた障子戸を開く。急ぎ、戸を閉めると、雅史は

合わせた棧を伝って畳の上に座り込んだ。

暗がりの中で、震える両肩を抱いて夜着を握り締める。

寒い訳ではない。だが全身は痙攣するように震え続けた。

指先に力を込めると、食い込む爪が滾る血流を戒め、息を吐く唇からは熱が放出される。荒い呼吸を繰り返し、小さく丸めた身体を一層きつく縮こまらせる。

耳の奥でこだまするアノ音を振り払うように頭を振るが、消えるどころかなお強く鳴り響き、雅史を悩ませた。

翌日、雅史は一睡もできずに朝を迎えた。

瞼は重く、身体も鉛のようだ。しかし、瞳を閉じるとあの映像が浮かび、雅史を苦しめる。

残像はやがて想像と交わり、形を変えて一枚絵と成る。

自身の中で構成されていくそれは、事実と妄想とが混在し、遂には雅史の内側を侵し始めた。

自分の姿が浅ましく、穢れたモノのように思えた雅史は、どうにか正気を保とうと水を浴び続けた。兄たちが不審に思って度々浴室の前に立つたが、気のない返事しかできず、一層困惑の念を深めることになった。

しかし、雅史は今、兄たちにさえ姿を晒せずにいる。当然、母の前にも。いつかの一件よりも深い部分で、この出来事は雅史を苛んだ。

幾日かが過ぎ、精神的に弱り果てていた雅史は、まるで夢遊病患者のように、母屋の一角へ向かって歩いていった。

薄い夜着でも冷えた空気が快く感じられる程に、雅史の身体は熱を帯び、浮遊感さえ漂わせている。

ぼんやりとした顔は頬を朱に染め、艶めいた美しさを放つ。おぼつかない足取りは、ひ弱な肢体を一層脆弱に仕立て上げ、不確かな、



蜉蝣のように消え入りそうな印象を携えていた。

身を蝕む感情に操られるようにして、雅史はそこに居た。

あの晩と同じく、風に紛れて耳に届く音に聴き入りながら、脳裏によぎった淫らな光景に身を震わせる。

最後に残った理性の抵抗空しく、雅史の身体は自分の意思とは関係なく動き始めていた。

…母さん、母さん、母さん… 若葉 つ！

はつと我に返った途端、激しい罪悪感と吐き気に見舞われて、雅史は駆け出していた。

後悔、自責、侮蔑、嫌悪、非難、そして哀しみが、雅史の身を苦しめる。

現実と夢の狭間から逃げ出すように、雅史はただひたすらに駆けた。

息苦しさが一層自虐的にさせ、全ての感情を強めた。

一心不乱に廊下を駆け抜けた雅史が転がり込んだ先は、自室ではなく、今は無人の長兄の部屋だった。

無意識の内に、雅史は自室とは反対の位置にある離れにやって来ていたのである。そして此处は、あの部屋から一番近い、独りになれる場所でもあった。

かつて、一日の大半を自室で過ごすしかなかった自分を氣遣った兄が、部屋にあるものを見せるために、よく連れ出してくれた場所だ。

そして案内された兄の自室には、地球儀や、見たことの無い蝶の標本や、天体の写真、光で姿を変える砂時計、万華鏡、螺鈿細工の望遠鏡。そして今現在雅史の部屋にある書物の多くは、兄から譲り受けたものだ。

兄の部屋には、世界の全てが詰まっている。

少なくとも、幼い雅史にとっては全てが真新しく、知識の宝庫に

思えたものだ。

懐かしさを覚えながら、薄明かりの中で雅史は兄の机に向かう。自分の口から漏れる荒い息遣いはいつの間にか震えており、静かな室内にやけに響く。

憑かれたように、白い手を伸ばし、雅史は机に突っ伏した。

「…兄さん…」

継る想いで雅史の口から零れた言葉は、吸い込まれるようにして、夜の静寂に消えた。

それから数日も経たない内のある晩、雅史の自室に再び若葉が訪れた。それは雅史が遂に、自室から出なくなってしまった日のことだった。

食事の席にも出てこなかった雅史の身を案じた彼女は、入り口に置かれた手の付けられていない食事に不安を覚え、廊下から声を掛ける。やはりと言うべきか、返事はない。

若葉は意を決して、障子戸を開いた。

「雅史さん…？」

右手を入り口の障子戸に添えたまま、明かりの点らない室内を、探るように若葉は踏み入った。そしてようやく、雅史の姿を窓際に認める。

初めはぼんやりとしていた影は、暗がりにも目が慣れるのに準じて、輪郭を露わにしてくる。

そして眼に留めた瞬間、息を呑んだ。

月明かりに照らし出された雅史の姿に、若葉は釘付けになる。

神聖ささへ放つ白い肌と、たおやかな肢体。くるりと振り返った視線に、引き寄せられるようにして若葉は窓辺へ　雅史の許へ歩み寄る。

自分を追う雅史の目を見返しながら、静かに傍らに膝を着く。やわらかな花の香りが、鼻先を流れた。

濡れた眸が交わり、暫時二人は見詰め合う。彼の目には蠱惑的な女の姿が映り、彼女の目には魅惑的な少年の姿が映し出されていた。深い色合いの瞳は深淵を思わせ、鮮やかな虹彩は優美に満ちている。

二人はどちらからとも無く、互いの距離を詰めていった。

一度ならばほんの戯れで済む。しかし二度目は

閉じていた瞼を開くと、息遣いも伝わる場所に、相手の顔があった。

引き合うように視線を絡め、再び唇を重ねる。触れた先から熱が広がり、蕩けるような錯覚の中で、体が痛いくらいに疼くのを感じる。そして互いの求めるままに、深く口付ける。呼吸を塞ぎ、思考を凌駕して、何度も。

若葉の後頭部に当てた雅史の手は艶やかな黒髪を手繰り、抱き締めるように引き寄せる。舌を絡め、互いの息さえも奪う口付けに、若葉は苦しい息を漏らす。しかし雅史の肩に伸ばされた細い指は、離れることを拒むかのように、強く、襟元を握り締めていた。

次第に雅史の腕は若葉の腰に進んでいき、一層強く抱き締めた。そしてその手が着衣に伸ばされたが、若葉は微かに身動きこそすれ、抗う素振りは見せなかった。むしろ、熱に浮かされ、雅史の胸に身体を預けているように見える。そこには、母という姿は微塵も無かった。

「失礼っ」

急に開け放たれた障子戸の外から、張りのある声が発せられた。弾かれたように若葉は雅史から離れ、正気を取り戻した瞳には困惑の色を浮かべている。

即座に朱を走らせ、耳まで赤くしながら彼女は立ち上がる。襟元を両手で隠すようにして、部屋を駆けて出た。

その背を一瞥して、声の主は眉根をきつく寄せたまま、室内に踏

み込んだ。

籠っている生温かい異様な空気を掻き消すように、声の主　紗霧は窓を開ける。

その下で、雅史は未だ夢を漂うかのような、焦点の定まらない眼を、ゆつくりと瞬かせていた。

次第に生じてくる自責の念に陶醉する様子で、雅史はしどけなく窓辺に寄り掛かる。その姿を眼にした紗霧は、柳眉を歪めて舌打ちを漏らした。

「これだからガキのお守りは厭なんだよ」

紗霧の口から吐き捨てられた言葉は、どこか雅史に心地良さを覚えさせた。

「イイか、よく聞けお坊ちゃん。そんなにシたいんなら親父殿に頼んで、困ってる者の中から一人回して貰え。お前の好みに適う女の一人や二人居るだろうからな」

「……………」

「ああ？　ハッキリ言わなきゃ解んねえよ」

既に口調を元に戻そうとは思っていないのか、そのまま紗霧は続けた。

「お前はいつもそうだったな。病気の兆候は言いやしな、薬の副作用も表に出さない、発作になってから初めて言いやがる。どれだけこつちの手を煩わせていたか、分かってるのか？　言わなきゃ伝わらないということ、お前のその変に賢い頭は理解してないのか？　兄貴どもに甘やかされた結果がこれかと思うと、過保護の弊害がよく解るよ」

紗霧は辛辣な笑みを浮かべ、黙り込み俯いている雅史を見下ろした。

乱れた着衣の襟元から覗く石膏のような白い肌に眉を顰め、自分の白衣を脱いで掛けてやる。

言いたいことを言い終えると、苛立ちよりも痛々しさを覚え始めた。

この姿は、確かに人を惑わす。

自覚の無いことが、一層、問題を深刻にしているのだろう。これでは父親の気持ち解らないでもない。

そう思うと、紗霧の口から自然と溜め息が零れた。

昼間の検診時に覚えた違和感と、これまでの雅史の様子から気になって屋敷に戻ってみたのだが、よもや危惧していたことが現実になっているとは、流石の紗霧も信じられなかった。

しかも、よりによって相手があの女性とは。何とも厄介なことに首を突っ込んでしまったものだと、頭を抱える暇もなく、紗霧はどうやって雅史を説得しようかと考えを巡らせた。

「…代わりは要らない…」

唐突に呟かれた言葉に、紗霧は目を丸くして顔を雅史へ向ける。

こんなにも早く、正気を取り戻すとは思っていなかった。否、今の雅史を正気と言えるのか定かではない。瞳には相変わらず虚ろな色が浮かんでいるし、身体も気だるそうにしている。そして何よりも、雅史の視線が平常のものとは思えなかった。

「あの人で無ければ、この気持ちは収まらない」

「…正気か、お前…。いくら血が繋がってなくとも、彼女は仮にもお前の母親だぞ。よく考えろっ」

「よく…？　さんざん考えた結果、出した答えです。貴女の言葉でも変わることはありません」

雅史の口元には、不敵な笑みが浮かんでいた。

紗霧はきつく眉根を寄せて、切り札とでも言うように、声を低める。

「在原の言葉でもか？」

紗霧が言っているのは長兄のことだろう。一瞬、雅史の眼が見開

かれたが、直ぐにそれは細められ、呟くほどの、小さな声で雅史は言った。

「…それでもです」

憧れの対象でしかなかった存在が、不可蝕で侵すことのできない筈の存在が、今、指先に触れたのだ。

在ることを眼にすることはできるのに、触れることのできないもどかしさから、やっと解放される。

そう思うと、雅史の胸には恍惚感が生まれた。

大きく、全てを包み込みながら、腕を伸ばしても掴むことのできなかった存在に、例外なく自分も充たされるのだと実感できる機会が、目の前に在る。

これをやすやすと逃せるほど、雅史は無欲ではなかった。

自分の前で嫣然と微笑みを浮かべる雅史の眼に浮かぶ、初めて見る光に紗霧は気付いた。

狡猾とも、寧猛とも違う、獣の眼。

言い様のないそれには、紗霧でさえ、捕らえられてしまうような強さを感じる。

思わず震えが走り、組んでいた腕に力を籠める。

「…ならば、お前の決心とやらを見せてみる。それができたなら、在原を説得することもできるだろうからな」

いつもの、心の奥まで見透かすような視線を光らせて、紗霧は雅史を見据えた。それに、雅史は真摯な眼で応えた。

翌日、朝食の後に雅史は自分の父を捕まえて、話があると切り出した。

珍しい雅史からの申し出に、父は驚いた様子を見せたが、昼過ぎならと言って、快く自室へ通した。

約束の時間まで、雅史は部屋に籠もり、射場にも行かず、静かに時を待った。

窓から見える空は、雲一つ無い青天である。それを目に焼き付けて、雅史は立ち上がった。

父の待つ座敷の前で立ち止まると、深く息を吸い込み、ゆっくりと、緊張を解すように息を吐く。

声を掛け、返事を待つて座敷に上がる。再び騒ぎ始めた鼓動に瞼を閉じながら、呼吸を整えていく。一步、二歩と父の前に近付いていくと、足元から冷やされていくような錯覚を感じた。

それが、やけに冷静に、雅史の面を上げさせた。

父が何か言った気がしたが、雅史の耳には届かない。入っても抜けてしまうのだ。

やがて雅史は、まっすぐと真摯な光を湛えた瞳で、自分の前に座す父を見つめ、口を開いた。

「父さん。貴方の妻を僕に下さい」

く瓊簪ノ節く (一)

夢の崩れる音がした。

音という音が全て吸い込まれるような感覚で、耳が痛む。

想像していたよりもずっと静かで、ずっと怜悯な音。雅史は暫くその音に包まれていた。

めまぐるしく変わり行く光景に、雅史は意識が流されるのを感じて必至にそれから抗おうとする。両手を握り締め、爪が掌に食い込んで血が滲もうとも、その痛みから現実であることを確認することの方が、余程怖かった。

自分が今、家人の男達に両腕を捕らえられて、自室に戻されているという事実と、そうなった発端の出来事を、思い出すことができなくなる程に、雅史を苦しめるものがあつた。それは、雅史の目の前で父が発した言葉。

「若葉を捕らえろっ！」

途端に、雅史は自分の口にした言葉が災いと呼んだことに気付いた。

それも、自分だけでなく想い人にまで及んだことを確信したのである。

父への諫言も虚しく、自分の声は荒々しく怒りに満ちた父の声に掻き消され、同時に雅史は座敷から引き摺り出されていた。

その横を父に呼び出された家人達が行き交い、中には自分の世話係であるサヤも居た。

サヤとは一瞬だけ目が合ったが、直ぐに父の居る座敷へと消えて行った。

何が起こるのか雅史には想像も出来ず、自室に入れられても直ぐ



にまた、部屋から出ようとした。  
しかし

「御館様の命により、お部屋に鍵を掛けさせて頂きます」  
能面のような顔をした家令が、儀礼的に頭を下げてそう告げた。  
その直ぐ後ろでは、工具箱を片手にやって来た男衆が戸の辺りで  
仕事を始めている。

雅史は言葉が出せなかった。声も、まるで吸い取られたかのように  
発することが出来ず、呆然として佇むばかりだ。

「これからは、御食事も係りの者が参ります故、お部屋にてゆっくり  
養生なさって下さい」

雅史を寢屋に押し込め、執事は室から出て行く。こちらの質問に  
は一切答えようとはせず、まるで聞こえてもいない素振りを見せた。  
それが平然と行われたことに、雅史は困惑を隠せない。

自分の取った行動はこのような仕打ちを受けるに値するものであ  
ったのか。

それが、自分の知らない外界の規律なのかと、心から思う。屋敷  
の中で十数年を過ごしてきた頭では、そう考えるだけで精一杯であ  
った。

雅史が自室に戻されていた頃、紗霧サギリの元にも連絡が入った。

それは客室に来るようにとの言付けで、急ぎの用件であるとだけ  
付け加えられていた。

紗霧は突然の呼び出しに困惑してはいたが、それを表に出すこと  
はなく、通された客間で当主を待った。

始めは、雅史の容態に何かあったのかと思って来たのだが、どう  
もそれとは別の件による呼び出しであるらしい。紗霧は思い当たる  
節を幾つか考えて、口にすべき答えを考えて居た。

暫くして外廊下から室内に入って来た当主は、開口一番に紗霧の  
解雇を言い渡した。

「…今、何と仰られたのですか…？」

「おや、聞こえませんでしたか。雅史の診察はもう結構ですと言ったのです」

あまりにも穏やかな口調で告げられ、紗霧は頭が真っ白になる。

意味はなんとか拾えたが、理由が解らない。そのようなことを告げられる心当たりは、紗霧にはなかった。

「…何故ですか。私の診察に、何か不手際があったとでも？」

「いいえ、そういう訳ではありません。雅史には別の医者を付けることにした。それだけです」

「私の腕に対するものでなければ、納得が行きません」

「……。そうですね。確かに先生のお蔭で、雅史は大分良くなりました。弓の腕も上達し、屋敷内だけでなく、外をも歩き回れる程に」  
小さな溜息の後、当主の顔から笑みが消えた。

「人と接することの苦手であつた雅史が、家人を始め、私の妻に対しても臆することが無くなる程に、成長しました」

紗霧は、当主の云わんとしていることに気付いた。当主の言葉は間違いなく、雅史と若葉の件を指している。

「…それならば何故、別の方を…」

「雅史の為です。先生のお蔭で、雅史は変わった。それなら新しい先生が来ても大丈夫でしょう。雅史の世界を広めて行くには、良い機会なのですよ」

尤もらしい言い分に、紗霧は言葉に詰まる。これ以上、自分が留まることを求めては、かえって怪しまれるというもの。しかし雅史を放って出て行くには、紗霧の気持ちが許さなかった。もとより紗霧は、自分の言が雅史を焚き付けておきながら、顛末を見届けずに屋敷を去るのはどうかと考えていたため、雅史の若葉に対する気持ちが無らかの結末を迎えるまでは、屋敷に残って居たかった。

「後任の先生には、私から書類を渡しておきます。これまで本当にお世話になりました。少しですが御礼として……」

「そのようなものは結構です」

紗霧は自分でも驚くほどに、はつきりと声を上げた。

「私は、このように中途半端な状態で患者を投げ出したくはありません。まだ体調も万全とは」

「それは解っております。ですから、医者には診せます」

「ならばどうして、私では駄目なのですか。理由をお聞きするまで、下がることはできません」

「実に、仕事熱心な方だ」

「いいえ、これは当然のことです。私に非が無いと仰って下さるのならば、医師を変える理由を教えてください。何故、私では駄目なのです。御子息の後ろ盾があるからですか？」

紗霧は勢いに任せて、胸の内に蟠っていた疑問までをも口にしていた。すると当主は、一層厳しい目付きで紗霧を見返した。

「……相変わらず、賢<sup>さか</sup>しい人間を送って来よる……」

嘲りを含んだ声音は、忌々しげな視線と共に、紗霧へと向けられた。

刹那、ざわざわと鳥肌に似た感覚が足元から全身へと襲った。

「シマダと名乗って居るが、シマバラの娘であろう？」

確信めいた口調に、紗霧の喉が鳴る。自分の素性がばれていると、瞬時に悟った。

眼の前で口許を歪めてこちらを見ている在原家当主に、身元が割れてしまっている。このままでは自分達のことを知れるのも時間の問題だ。直ぐに話題を変えなければ。何か、当主の気を引くような話題を。

「あの家の女共はいつも分を弁<sup>わきま</sup>えず、楯突いて来る。まあ、女に限ったことでは無いか。アレも、鳴原の者だったからな。…まったく嫌なことを思い出させる……」

紗霧は震える指先を握り締め、視線に力を入れた。

「…そう。その眼だ。私から雅を奪って行った男の眼。この手で抉り取ってやりたくない。…お前は、奴の血縁者か？」

息苦しさを覚えながら、紗霧は口を開く。

「私は、シマバラ ソウイチ氏の血を引いています」

「そうか、惣吉の。では、チドリチドリの娘か…お前が……」

紗霧の身体に、悪寒に似た震えが走った。

聞きたくない衝動に駆られ、話を変えようとする。しかし上手く言葉が出ない。声さえも、自分の感情に反しているかのようだ。

「何を驚いている。単純なことではないか。十数年前、この家に頼ってきた千鳥のことを話しているだけだ。それに、今のお前なら解るだろう？」 鳴原の家に入ったお前ならば。千鳥が一人で桑折コウセの

家に行けた術は無い。まして鳴原の家から逃げ出せた筈も、追っ手から逃れられた筈もな。全て、他の力があつてこそ成されたことだ」

喉の奥で噛み締めるような、狡猾さを露わにした笑いを向けられ、紗霧は顔を歪めた。

記憶なら、ある。

幼い頃に見たであろうそれは、記憶と呼ぶにはあまりにも不確か  
で、断片的なものばかりだが、それでも鮮明に浮かぶ映像がある。  
脳裏にこだまする声がある。懐かしさと、悲しさを併せ持つ過去の  
時間。紗霧はうる覚えな記憶を振り払うように、頭を振った。

しかしその行動を愉しむ様な声音が響く。

「…憶えて居るようだな、お前の頭は」

自身の額を指差し、悪辣な笑みを見せてくる在原家当主に、紗霧は眉根をきつく寄せることしかできず、奥歯を噛締める。

「流石は鳴原の縁者だ。記憶力は良いと見える…否、千鳥の血を引いているならば当然か。千鳥も嫌に賢い女で、やたらと記憶力が良かったからな。医家の嫁となるには十分すぎる程の素質を持った女であった。お前を見ていると、私でもそれを実感するくらいだ。

…そう言えば、千鳥は息災か？」

「…私の口から、そのことを聞きたいのですか？」

「おお、そうだった。千鳥は十年前に他界したのであったな……。年を取ると、どうも記憶が鈍る」

わざとらしい口振りで言っただけのけた当主の口許には、相も変わら

ず人を小馬鹿にした嘲笑を浮かべている。

悔しい気持ちで、紗霧の握り締められた拳は震えていた。

「…だが、覚えていることもある…。恩を仇で返した人間の名は、決して忘れはしない」

在原家当主は声を低め、下から睨みつけるような視線で、紗霧を見つめた。その視線に含まれた鋭い感情に、紗霧は恐怖を覚える。初めて実感した、激しい憎悪から成る殺気。肉体的ではない、精神への絶対的な恐怖が、紗霧の思考を止める。鼓動は早鐘のように打ち続け、息苦しさを伴う。嫌な汗が背中を伝い、指先が冷えていく。紗霧の身体は、まるで縫い付けられたように動けなくなっていた。

「御館様。お医者の方がお見えになられました」

突然、障子戸の向こう側から声が掛かり、室内の空気が一変する。そのお蔭で、紗霧はやっと呼吸ができるようになった。自分でも気付かずに、息を止めていたのだ。

「分かった、私が出よう。お前は、嶋田先生を玄関までお送りしなさい」

「かしこまりました」

在原家当主は、障子戸を開けて外廊下に膝を付いている、家人・サヤにそう言付けた。既に顔は平生の当主の顔だ。

「嶋田先生。今までご苦勞様でした。では、私はこれで」

振り返った当主は、薄く笑みを浮かべて紗霧に一礼した。その微笑みは、勝利を確信したようにも見える。先刻の恐怖から解放されながら、紗霧は愕然とした。

しまった。

当初の目的を果たすことなく、時間切れを迎えたのだと、当主の微笑みから理解する。

当主に軽くあしらわれたのだ。過去の話など本当は何の意味も持たず、自分がその話から逃れようと思案したと同様に、当主もまた、

解雇の理由の話の話を逸らすために過去の話を持ち出したに過ぎない。

「玄関まで、お送り致します」

当主が出て行った後室内に入って来たサヤは、畳の上に置かれていた鞆や荷物を手にし、紗霧の側へやって来た。仕方無しにサヤの先導に続いて、紗霧は唇を噛み締める。この結果は、自分の慢心が生んだものだろうか。それともただ、当主の力に及ばなかっただけなのか。何れにしろ、在原家の長男である志雅ユキナリに、この事態を知らせなければならぬ。紗霧は考えながら、外廊下を玄関へ向けて進む。

冷えた夜風が吹きぬけ、夏の終わりを感じた。

く 瓊簪ノ節く (二)

紗霧が解雇され屋敷から出された後、雅史の元に新しい医師が父に伴われてやって来た。

月村ツキムラという名のその男は、紗霧ほどではないにしろ、歳若く整った顔立ちをしていた。

けれども雅史に向けてくる視線には、何か陰のような裏を含んだものが窺え、表情も作り物染みた薄い笑みが浮かべられていた。

そのことに雅史は嫌な気がしたが、父の決定事項に反抗することもできず、月村医師の診察を受ける他なかった。そして言葉を交わす内に、始めのころ感じていた嫌な感じは懐かしい気持ちに隠されて行つた。

何故なら月村の放つ空気が、長兄のそれに似ていたからである。

また、月村の視線の中に時折見られる柔らかいものを見つけた雅史は、以前の医者とは違う人物であることに、少し安堵していた。

寡黙で、自分の役目を忠実にこなしていく。変に詮索しようとすることもなく、診察が終わると直ぐに部屋を出て行くので、助かると言えば助かる相手である。

ただ一つ難を言つとすれば、薬の量が増えたことくらいだ。その他は、紗霧の診療と何ら変わりはなかった。少なくとも雅史には、月村の姿はそのように映っていた。

それから数日の間、雅史はずっと独りで部屋の中に居た。

何するでもなく、ぼんやりと外を眺め続けた。晴れの日も雨の日も、ずっと窓辺に腰掛けて空を見上げていた。

始めの頃は、何かと理由を付けて部屋の外に出ようとしたが、自分に許されたのは離れの一角のみで、それも目付け役を伴つたものだ。毎日決まった時間にやってくる月村医師と家令の老人、それから身の回りの世話をするサヤとしか、雅史は会うことができない日

々を送っていた。

そんな或る日の夜、雅史の身に異変が起きた。

体中から力が抜けて眩暈を覚えた瞬間、意識を失った。

直前に感じたものはどこか眠気に似た感覚で、ひどく安らぎを覚えた。しかし意識を保つことのできないその波に吞まれ、雅史は崩れたその場所で、身体を丸め込んでいった。

どれ程の時間、そうしていたのか分からないが、雅史を気付かせたのは来訪者の声だった。

それは直ぐ上の兄・雅匡<sup>マサタケ</sup>である。

雅匡は夕食後、庭を伝い雅史の部屋にやって来たのだ。そして何度か声を掛けた後、僅かに開いていた窓から室内を窺った雅匡の目に飛び込んで来たものは、畳の上でうずくまる弟の姿であった。

「雅史っ！」

窓枠に脚を掛けの中に入り直ぐ様駆け寄って声を掛けるが、返答は無い。険しく眉根を寄せ、額には玉の汗が滲んでいる。顔色も、室内灯に照らされているだけでも、蒼白として生気が少ないのが分かる。まるで蠟のように白い肌が、血の色を忘れて白く発光しているかのようだ。そして触れた身体は氷のように冷たく、雅匡は不安に駆られた。顔を近付けて呼吸を確かめると小さな息遣いが感じ取れ、微かだが、雅史はその唇を震わせて言葉を口にした。

「兄、さん……」

雅匡はそれが雅史の応えだと思い、もう一度声を掛ける。

「雅史、大丈夫か。俺が分かるか、雅史」

「……兄さん……？」

「そうだ。お前の兄だ。分かるんだな、雅史」

雅史の肩を揺るようにしながら、雅匡は声を掛ける。今度は、言葉ではなく肯きを返された。薄くではあるが、雅史の瞼も開き、その眼には自分の姿が映っている。

雅匡はようやく安堵の息を吐くが、雅史の方はまだどこかぼんや



りとしている。こちらの声に応えてはくれるが、条件反射とでもいうのか、ちゃんと頭脳を通して出された応えではないような感が強い。再び困惑の色を浮かべて、雅匡は支えるように雅史の背中に手を伸ばす。腕に掛かる雅史の身体は、とても軽く感じられた。

紗霧が解雇され、雅史の新しい主治医として入った男に、雅匡はまだ会ったことが無い。兄である雅恭ナリチカと周雅チカマサが遠目に見たというのを聞いたくらいで、名前も覚えてはいなかった。しかし雅史がこのような状態であるのならば、呼ばない訳にはいかない。自分が窓から入ったことも忘れ、雅匡は連絡を取るため人を呼ぼうとした。だが声を上げる前に、雅匡の腕を雅史が掴んだ。

「…兄さん…」  
微かな声に呼ばれて雅匡が顔を向けると、雅史は小さく首を振った。

それが人を呼ぶなという意思表示だと気づき、雅匡は口を閉じる。すると険しかった雅史の眉が解かれ、ほんの少し、口許に笑みが浮かべられた。

雅匡は少し気に掛かってはいたが、雅史の体を持ち上げると、窓辺の椅子に座らせた。

夜風を受けた雅史は、心地よさそうに瞼を閉じて呼吸を整える。それを傍らで見詰めながら、雅匡は雅史の回復を待った。

どうしてこんなことになったのか、若し雅史が理由をいつているのなら、教えて欲しい。その為に自分は部屋に来たのだから。雅恭も周雅も、心配している。そして紗霧も、雅史の様子を気に掛けているのだということを、雅匡は雅史に伝えなかった。

「…兄さん、どうして此処に…？」  
気分が戻ったのか、雅匡の方に視線を注ぎそう尋ねた。

「お前が突然倒れたって聞いて帰ってきたんだが、部屋には通してもらえなくて、窓から入らせてもらった。雅恭兄も周雅兄も心配している。何かあったのか、雅史」

兄の問い掛けに答えが見付けられず、雅史は口を閉じる。理由は解っている。否、解っているつもりであった。しかしそれを口に出る程、雅史は強くなかった。

「嶋田先生が辞められて、新しい医者になったそうだが、そいつとは上手くいっているのか？」

黙り込んだ雅史に、雅匡は話題を変える。雅史にとって、今回の件は辛いことに他ならないのだと考えたのである。

「はい」

「そうか。体の方はどうなんだ。親父に聞いても何も教えてくれな  
いし、家の奴らは皆、知らない・の一点張り。実際、体調は良くな  
いのか？」

「……。少し気が滅入ってしまった。でも、直ぐに良くなると月村  
先生は仰っていました」

「ツキムラ……？ それが新しい医者の名前か？」

「はい。子供の頃の先生に比べれば、良い先生です」

「それは良かった。……お前には辛いかも知れないが、親父の怒りは  
まだ続きそうなんだ。俺たちともなかなか会おうとしないし、お前  
と会うことを禁じている。雅恭兄がなんとか話をしようとしてくれ  
ているが、望みは薄そうだ。でも、俺たちがお前の兄であることに  
変わりはない。何か力になれることがあれば、遠慮なく言えよ」

「ありがとう、兄さん」

雅匡は柔らかく微笑んで、雅史の肩に手を乗せる。兄の温もりが  
伝わり、雅史はぎこちなく微笑みを返した。

「お前さえ良ければ、雅恭兄たちとも会わないか？」

「……だけど、父さんが許していないのに、大丈夫？」

「心配は要らない。勿論、表立ってという訳にはいかないから、今  
日みたく窓からってことになると思うんだが……」

「でも、もし見つかってしまったら兄さんたちにも迷惑が」

「何時でもってことじゃないし、見つかったらその時はその時。俺  
たちのことは心配するな。上手く立ち回って見せる」

「兄さん……」

「お前自身は、どうなんだ？ 嫌か？」

雅史は首を振った。嫌な筈は無い。むしろ嬉しい申し出である。この部屋から滅多な事では出られない身となり、離れの敷地ですら自由にならない状態では、気に掛かることばかりが頭に浮かび、悩むことしかできない。今だって、兄の顔を実際に見ることができてどれ程嬉しかったのか。いくら月村の診療が不快でなくとも、自分を囲む環境を変えられるのならば変えたい・というのが本心である。

再び雅匡に尋ねられ、雅史は逡巡した後、兄の申し出を受けた。

その日を境に、雅史の部屋には三人の兄たちが交代で部屋を訪れるようになった。無論、窓からの人目を忍ぶ訪れではあったが雅史の心は、ずっと軽くなっていた。

しかし、それも若葉の近況を聞くまでの短い間に過ぎない。

雅史が胸中で燻っていた事柄を次兄・雅恭に尋ねた時から、その穏やかな時間は全て塗り替えられていったのである。

意を決して、なるべく怪しまれぬようにとして雅史が聞くと、兄の口からは母の姿をここのところ見ていないと返された。

あまりのことに、雅史は一瞬気を失いかけた。それからというもの、若葉の身が気になって眠ることもできなくなり、雅史は兄に会う度詳細を訊ねるのであった。

そんな或る日の夜のこと、不意に自分を呼ぶ声が聞こえた気がして、雅史は目を覚ました。瞼を開けると見慣れた天井が見え、体にはきちんと布団が掛けられている。まだはつきりとしめない意識の中で目を動かし、辺りを見回す。するとまた、声が聞こえた。

「……雅史。聞こえるか、雅史」

ようやく身体にも力が入るようになり、身を起こして声のした方を向く。すると枕元の窓に、人影が在った。

「…兄さん…？」

窓辺に近寄り、確認するように呼び掛ける。応えを待ち、窓を開けると、其処に立っていたのは次兄の雅恭であった。外から直接来たのか、雅恭は外套を纏ったままの姿である。

「悪いな、眠っていたのか？」

「少し……」

雅恭の問いに答えたものの、雅史には自分がいつ眠りについたのか、確かな記憶がなかった。

「顔色が悪いな…。大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。どうぞ、上がって下さい」

雅恭が部屋に入れるようにと窓から離れようとしたが、その前に呼び止められる。

「いや、手短に済ますから、そのまま聞いてくれ。お前が気にしていた若葉　母さんのことだが、どうやら今は奥屋敷の蔵の方に居るようだ」

「蔵…？」

「ああ。お前は知らないかもしれないが、母屋から北廊下を渡った所に在る奥屋敷の一角で　本当に大丈夫か、雅史」

雅史の顔色が変わったことに気付いた雅恭は、それが病からくるものだと思い、話を止める。しかし雅史の頭では、若葉が蔵に閉じ込められていることだけが廻っていた。

「雅史、一先ず横になって居た方が良いだろう。また明日にでも来るから、今日のところはゆっくり休め」

雅恭に促され、雅史は小さく頷きを返して窓から離れた。

その背を見送ると雅恭は外側から窓を閉め、裏庭を通って玄関へと向かう。雅史の様子を思うと、その場を離れ難いものがあつたが、あまり長く居ては返って身体に障ると考えた結果の行動であつた。

「雅史の様子がおかしい」

唐突にそう切り出したのは周雅チカマサであった。

室内に居た雅恭ナリチカと雅匡マサタケが振り向くと、周雅は後ろ手に障子戸を閉め、秀麗な眉を歪めている。今夜は周雅が訪ねた日なのだが、どうやら部屋で何かあったようだ。

二人が話を聞くと、周雅は頼まれた書物を届けるために多少約束の時間からは前後したものの、新しい主治医の月村が部屋を出た後、頃合を見計らい部屋へ向かったという。しかし行ってみると室内に明かりは無く、返事も無い。何度か声を掛けたものの、仕方なく周雅は一度引き返すことにした。そして再度夕食後に訪ねてみたが、またしても室内は暗がりの中。無駄と承知で声を掛けてみれば、今度は夢うつつで対応に出たという。

「前は、そんなことはなかった。話の途中で寝入ることなんて以ての外だ。雅史は、決してそんな奴じゃなかった」

どこか苛立たし気に言い捨てて、周雅は窓辺に腰掛けた。

確かに、以前の雅史ならば約束を忘れることなどせず、むしろ自分達の方が忙しさに忘れてしまうことが多かった。そして何よりも屋敷内に独りで居る時間の長い雅史は、兄たちの話を楽しみみに行っている様子で、話し始めればなかなか放してくれない程だった。

そんな雅史が、話の途中で眠ってしまったというのは余程のことだ。いくら身体が弱っているとは言え、礼を失する態度は取らない人柄であっただけに、周雅も異変を感じたらしい。無論、それは雅恭や雅匡にとっても同じである。それぞれが出向いた時に受けた雅史の印象が、周雅のそれに近い覚えがあった。

「確かに、最近の雅史は意識の薄い感じがするな……」

「アレは、体調の所為に思えないんだが、二人はどう思う？」

「俺は、雅史にも色々あったようだし、心労から来ていると思う。」

周雅兄は？」

「俺も最初はそう思っていたんだが、どうも違う気がする。恭兄はどう考えているんだ？」

「二人の間。心労も考えられるが、他の要因もあるだろう」

「雅恭兄の言う他の要因って、何？」

「新しい医者。そうだろ、恭兄？」

周雅の推察に、雅恭は黙って肯きを返した。

兄たちが自分の様子を気に掛けている頃、雅史は必死に机の中を漁っていた。雅史の推測が正しければ、蔵の鍵を自分は持っている筈なのである。

以前 長兄が家を出る時に、雅史は二本の鍵が結わえられた組紐を手渡された。その鍵には確かに、鶴の紋様と梅の紋様がそれぞれに刻まれていた。貰った当初に、その細工の美しさに惹かれて何度も見ていたから、間違い無い。

そして若葉の食事はいつも執事が持つて行くということと、執事の腰から下げている鍵束の一つに、それと同じ紋様の鍵が付いていたことの二つを合わせれば、おそらく雅史の考えは外れていないだろう。

「 あった…！」

引き出しの奥の小箱の中に、其れはあった。

組紐の両端に結わえられた二本の鍵は、雅史の記憶通りの姿である。翼を広げる鶴と梅の花。雅史は鍵を両手で強く握り締めた。

そして次の日の夜、雅史は食事を片付けに来たサヤが廊下を遠ざかって行く足音を聞くと、布団から出た。

決行は今夜。他には考えられなかった。

急いで窓辺に寄り、窓を開ける。吹き込む夜風の冷たさに身が引締まる思いを感じながら、雅史は意を決して窓から庭へと降り立った。裸足の足にヒンヤリとした土の感触が広がり身を竦めるが、直

ぐに気を取り直して雅史は目的の場所へ向かった。

「こんなところに居たのか、二人ともっ」

廊下から慌しい足音を響かせてやって来た雅匡は、障子戸を開け放つと、室内に居た二人の兄に事態を報せた。

「大変なことになった、雅史が部屋に居ない！」

「何だと!？」

「家の者には聞いたのか？」

驚きに声を上げる周雅を制し、雅恭は冷静に事態を受け止めて雅匡に部屋の様子を尋ね始める。

「食事はサヤが持つて行っているし、その時は確かに居たそうだから、ここ数分間に、抜け出したようなんだ。鍵は時間通りに返さされていて、入り口の鍵も閉まっていた」

「ということは、雅史は窓から出たというのか…?」

「じゃあ、早く捜しに出ないと」

「待て。闇雲に出て行っても、家の者達に見つかる。これは、俺たちで何とかした方が雅史の為にも良いだろう。雅史が向かった先に、少し心当たりがある。俺はそっちに向かう。周雅と雅匡は、一先ず他の者達に事態がばれないように、何とか隠し通してくれ」

「解った」

「こっちは任せてくれ。雅史を頼む、恭兄」

三人は部屋を出て、それぞれ別方向に向かった。

周雅と雅匡は離れへと続く渡り廊下へ向かい、雅恭は北廊下へと向かう。

今日は運良く父親の帰りが遅い。しかし薬の時間までに雅史を見つけないければ、いくら二人が頑張ろうとも、執事に見つかってしまうのは必至だ。そうなれば今よりもずっと厳しい監視下に雅史が置かれるのは眼に見えている。何としても、時間前に雅史を部屋に戻さなくてはならない。雅恭は、ただ一心に奥屋敷を目指した。

奥屋敷の一角に在る蔵の前に辿り着いた雅史は、握り締めていた鍵を扉に掛けられた南京錠の鍵穴に差し入れた。

右に回すとカチリと音を立てて、鍵が外れる。

雅史は一度深呼吸をして、重い扉を引き開く。

中からかび臭い空気が流れてきて思わず顔を逸らす。雅史はゆつくりと中の様子を窺った。

明かりは外から差し込む月明かりだけ。奇しくもこの日は、満月であった。

この中に、あの人が居る。

雅史は兄から聞いた情報を頼りに、母・若葉の姿を蔵の中に探した。

一階には古筆筒や柳行李が並べられており、薄暗く、人の気配など無い。雅史は壁際に階段を見つけ、二階に上ってみた。梯子のように急な階段を上がると、和筆筒と棚が見え、一階の様子と変わらないと思う。しかし、上り切ったところで雅史の目に飛び込んで来たのは、木格子で区切られた座敷牢のような一間であった。その中に、若葉の姿を認めた雅史は、急ぎ格子の前に駆け寄った。

「…母さん…っ」

雅史は不思議なくらい自然に、その言葉を口にした。

木製の格子から覗いた母の姿は、高窓から差し込む月明かりに照らされて、妖艶さを際立たせていた。そして何よりも、若葉の格好に雅史は目を逸らしたくなかった。

崩れた帯と、乱れた襟元。整えられていた黒髪は乱雑に解け、結い紐だけが、かろうじて若葉の頭に見て取れる。はだけた裾から覗く白い足首と膝から太腿に至る脚線から、かつて口付けを交わした



一刻が呼び起こされ、雅史は胸に痛みを覚えるが、軽く頭を振ってその残像を払い、今度ははつきりと、若葉を呼ぶ。

「母さん、助けに来ました。…母さん」

おもむろに若葉は首だけを動かし、格子の前に立つ雅史の方を向いた。その眼に自分が映っているか定かではないが、それでも雅史は自分の呼び掛けに応えてくれたことに、頬を緩める。

焦点の合わない、光の薄いその眼が、何を見ているのか知らぬ内に、雅史は鍵穴に鍵を差し込んだ。

錆付いた音を立てて、鍵が外される。牢の格子戸を開き、声を掛けるが、若葉はまた外を見上げ始めていた。

「…母さん？」

雅史は微かな不安を覚えて、牢の中に踏み込む。

「何を、見て居るのですか？」

努めて優しく、声を抑えて訊ねてみる。答えは無い。

雅史は一步、若葉に近づく。

相変わらずぼんやりとして座り込んでいる若葉の側に膝を付き、もう一度声を掛ける。しかしやはり応えは無い。雅史が近くに来たことに気付く素振りも見せず、若葉は外を見上げ続けていた。月影でも見えるのだろうか、雅史も做ってみるものの、高窓の枠から窺えるのは、一欠片の夜空だけ。星の輝きがせめてもの救いで、木々の姿さえ認めることはできない。雅史には見えない何かを、若葉は見ているのかも知れない。

普段ならそのような姿も愛らしく思われるのだが、今は家の者たちに気付かれる前に、若葉を此処から出さなければならぬ。そのため、雅史は来たのだから。

雅史はもう一度、声を掛ける。今度は少し首を傾け、若葉の視界に入るように身体を寄せ、そして若葉の肩に手を乗せる。その瞬間

「っ！！！」

強い力で腕を払われ、そのまま肩を掴まれる。突然の出来事に驚

いている間に、雅史は若葉に押し倒されていた。

激しく床に叩きつけられ、後頭部に鈍い痛みが走る。同時に肩に寄せられた腕から体重を掛けられ、押さえ込まれる。雅史は頭と肩、背中の痛み顔に顔を顰めた。腹部には片膝を寄せられ、身を起こすこともできない。

息苦しさも伴い、雅史が口から息を吐くと、頭上から小さな笑い声が零れた。

雅史はそれを単なる気のせいだと思いたかった。しかし見上げた先に在る若葉の表情は、小さく笑っていた。

月明かりにも眩しい妖艶な唇は、笑みの形に歪められ、白い頬は上気したようにほんのりと染まっている。

けれども、何故だかその顔が雅史には泣いているように見え、息苦しさよりも、強い哀しみを覚えた。

雅史の視線からその感情を感じ取ったのか、若葉は一瞬眼を見開き、次いで感情を押し殺したかのように、冷たい視線を雅史に注ぐ。そして指先に力を込めた。

若葉の顔を見上げながら、雅史は身体のを抜き、瞳をゆっくりと閉じる。

心は決まった。

それまでの恐怖心などどこかへ去ってしまったように、気持ちはずいぶん穏やかになる。

意識が遠のき始め、よいよかと思った瞬間、頬にひんやりとした感覚が広がった。

雅史の頬を伝い、耳の辺りまで流れたそれが涙であると知ったのは、瞼を開いたその前に、影を帯びてこちらを見下ろす若葉の目に浮かぶ雫が、眼に入ったからである。

雅史は自分の上で涙を流す若葉を見詰めながら、首に伸ばされた小さな震える手にそっと触れ、そして言った。

「母さん……。あなたになら、この命も惜しくはありません」

く艶紅ノ節く (一)

目が覚めた時、自分の側に欲しかった顔を見つける事はできなかつた。

だが、それが当然であることを自分の頭は悲しい程に理解していた。

「雅史：っ！！」

瞼を開いた雅史に気付き、最初に声を上げたのは雅恭であつた。

続いて周雅、雅匡の姿が視界に入る。自分を覗き込む顔に安堵の色が浮かびきる前に、兄たちを掻き分けるようにして父が目の前に現れた。

疲れの滲むその顔色に、雅史は少しばかり胸が痛む。

「雅史：良かった、気が付いて」

父は雅史の無事を確認すると後から入って来た月村医師にその場を空け、自分は隣で雅史の診察を見ていた。

本当に良かったと何度も呟く父の姿は、とても小さく見える。

つい先日、自分のことを厳しく叱り付けていた人物と同じであるとは到底思えない程に。

「 体の方は大丈夫でしょう。包帯を替えていきますから、もう少しお休みになって下さい」

月村はそう言うつと雅史の首に巻かれた包帯を取り替えて、父である在原家当主と共に室を後にした。

二人が出て行った後、眠る気にもなれなかつた雅史は、側に居た雅恭と話をすることにした。

どうしても聞きたいことがあつたのである。

一体誰が自分を此処に運んだのか。そして若葉は今どうなっているのか。

他にも気になることと眠れない理由とがあつたが、雅史はそれを

伏せておいた。

雅恭の話によると、見付けたのは兄である自分で、駆け付けた時には、雅史は気を失っていたらしい。若葉については、まだ牢の中に居るといふ。扉が開いていようと、若葉に出る気はなかったと雅恭は付け加えた。

にわかには信じられない様子であった雅史も、あの時の若葉の様子を思い出したのか、少しだけ納得した様子を見せた。

茫然としていて意識があるのかさえ疑わしかった若葉の姿。どこか壊れてしまった人形のように、雅史の脳裏に残っている。若葉が起こした行動も、その所為だろう。そしてそれは、雅史の胸に新たな考えを芽生えさせていた。

次に雅史の質問は、紗霧のことへと変わった。

何故突然止めてしまったのか理由を聞いてはいないかと、雅史が尋ねると、雅恭は答えに戸惑ったが何も聞いていないとだけ口にした。そして雅史が眠り始めたのを見届けた後、この場を雅匡に任せて室を出た。

翌日から、雅恭は雅史の部屋に姿を見せなくなった。

家には帰って来ているらしいが、直ぐに何処かへ行ってしまふのだと雅匡から聞いた雅史は、何かあったのだろうか、不安を募らせていた。そこへ、周雅が一通の手紙を持って部屋を訪れた。それは雅恭から雅史に宛てたものであった。

内容は、月村を遠ざけるといふものだった。

何故そのようなことを言い出すのか、雅史には直ぐには解らなかつた。けれども文の続きを読み進めて行くうちに、愕然とした。

自分の症状と、雅恭の記した薬の症状とが、酷似していたからである。

抑え難い眠気と、記憶の混濁。それによれば、自分は眠っていたと思っっている間でも、起きている時間があるという。つまり、自分

の意識が無い状態の時間があるということだ。

全身に震えが走った。

握り締めた兄からの手紙が、文字列から解き放たれて雅史の脳内を駆け巡る。そして雅史は決断した。

「雅史、何を言っているのか解っているのか!？」

父の言葉を聞き流すようにして雅史は顔を背ける。

今の雅史にできる精一杯の抵抗であった。

「雅史、よく考えなさい。お前の体はまだ完治した訳じゃないのだよ。今だつて胸の痛みがある筈だ。そんな体で、医者診察を断るなんて自殺行為だぞ。…何をそんなに苛立っているのか…。不満があるなら言ってみなさい。出来る限りのことは、叶えてやる。お前は私の大切な息子だからね」

宥めるように、努めて声を和らげながら雅史に言った。

「言ってみなさい、雅史」

「…ならば、兄を…。兄さんと呼んで下さい」

「雅史。それは出来ない。あ奴はこの家を出てから、私には何の連絡も超越していない。何処で何をしているのかさえ、判っていない」

「ならば、このままで構いません。僕のこととは放っておいて下さい」

「雅史…っ」

雅史は頭まで布団を被り、断固として自分の意見を通し続けた。

何と言われようと、気持ちには変わらない。その証拠に、月村が来てても口を利かず、奥の書室に閉じ籠もり診断を拒否した。

体が衰えるのが先か意識を失うのが先か。雅史にとっても、これは大きな賭けであった。

（艶紅ノ節） （二）

数日が経ち、雅史の強固な姿勢に折れたのか、父である当主は遂に紗霧を呼び戻す決断をした。

このことには雅恭たちの言葉もあつたが、何よりも月村医師本人の口添えがあつてのことだつた。

しかしそれらは全て伏せられ、表面的には父親が息子の我侭に譲歩した形となつていた。

そんな背景もあり、紗霧は屋敷に呼び出された時、長男が帰つてきたのかと思つた。でなければ、裏があるとしたか考えられない。そのうゑ診察の為でないと言われれば疑うなという方が無理だ。

雅史の部屋に通されても、紗霧の疑念は晴れなかつた。

当の雅史が自分を見た時、驚いた表情を見せたからである。

「どうして、先生が……？」

「サヤを見に来られたそうです。御館様からお許しは頂いておりますが、長居はご遠慮下さいませ、嶋田先生」

雅史の問いに答えたのは、紗霧を案内した家令である。そしてお茶を置くと、一礼して室を出て行つた。

紗霧は一先ず居住まいを正して、雅史の前に座すことにした。

「……サヤを知っているのですか？」

雅史は素直な口調で疑問を口にしていた。当然な質問である。これまで一度たりとも、そのことに触れたことはなかつたのだから。

出来ることなら、触れずにいたかつたことでもある。

紗霧はにわかに眉を顰め、視線を逸らした。微かな舌打ちさえも聞こえてきそうだが、それでも口元には笑みを浮かべて、雅史の問いに答える。

「彼女は、私の妹の異母妹にあたる」

言葉の端に引つかかりを感じて、雅史は微かに眉根を動かした。

しかし紗霧は意味あり気な視線を残しただけで、口を閉じる。こ

れ以上は詮索するな・と言うことらしい。

自分の物差しで測ってはならないことくらい、雅史にも解っているが、それでも血の繋がりに意味を見出したいと思う気持ちは抑え難かった。

「ところで、その首の包帯は何だ？」

「あ、これは……少し……。それよりも、兄さんは元気ですか？」

「在原には、連絡をした。だがまだ返事は来ていない」

「そうですか……」

「何か伝言があれば、伝えておこう」

「いえ、少し気になっただけですから」

雅史は先日父から聞いた言葉を思い出す。

兄は家には一言も連絡を入れていないという。

一体兄は、今何処に居るのだろうか。

「そう言えば、裏庭の楓の木は伐ってしまったんだ」

「え……？ どうして、それを？」

不意に振られた話題に、雅史は疑問を覚える。

裏の楓と言えば、屋敷内に一本だけしかなかった木で、紗霧がこ

の家に出入りした頃には既に伐られていた筈だ。

「あ……まあ、雅恭たちに聞けば知れてしまうことだから言っが、

私は幼い頃、在原家の屋敷で数日過ごしたことがあるんだ」

「話を聞いても、良いですか？」

紗霧は、じつと雅史の瞳を見つめた。

深淵たる双眸の奥に見える微かな光を雅史の正気であると信じ、

紗霧はゆっくりと口を開いた。

「……あれは、君が生まれる以前の話だ。私が在原家を初めて訪れたのは、雪の降り頻る寒い日のことだった。私は母に手を引かれ、屋敷の門を潜った。その頃は、先代である君の祖父が御当主であったが、既にお父上は事業を確立し、後継者として周囲からの信望も篤かった。だが、私と母が在原家を訪ねたのは、お父上に会うためではない。母の友人である在原ミヤビ　君たちの叔母に当たる



人物に会うためだった。正確には、私の叔母・ミツコさんを介してミヤビさんと会い、ミヤビさんの助力を願ったというのが本当だ。そして二人の力を借りて、母は鳴原の家から出ようとしていた」

紗霧は重い記憶を脳裏に甦らせながら、瞳を閉じる。

伏せた睫が微かに揺れて、再び瞼が開かれた時には、紗霧の視線は窓の外に向けられていた。

雅史はその淡々として語られる昔話に、妙な息苦しさを覚えながら耳を傾けた。

「：当時私は何のために在原家に来ているのか解らず、単に、母の友人宅に滞在する旅行か何かと思っていた。そしてそこで、君の兄たちと出会った」

「ユキナリ兄さんと、ナリチカ兄さん…？」

「そうだ。二人が私の遊び相手をしてくれたんだ。歳も近かったし、私も男勝りなところがあつたから、話が合つたというのもある。だがそれよりも、私たちを繋げていたのは二人の叔母であるミヤビさんの力が一番だったと思う。丁度その頃、君のお父上は新しい奥さんを迎えたばかりで、兄弟の面倒は先代の妻　君の祖母とミヤビさんが、見ていた。きつと、ミヤビさんに母親の面影と重ねていたんだろう。かくいう私も、母には甘えられない寂しさをミヤビさんに救ってもらっていた口だ」

次第に視線が和らぎ、紗霧の口調も穏やかになっていたことに雅史は気付く。

薄く口許に浮かんだ笑みが、とても安らかな表情を見せており、雅史は寸分の驚きを覚えながら、紗霧を見ていた。その記憶が紗霧にとって、決して苦いものではないことをその姿は物語っていたのである。

しかし一度目を伏せると、紗霧の眉間には深い皺が刻まれていた。「その後、私と母は桑折家<sup>コオリ</sup>で世話になることとなり、在原家を後にした。それからしばらくは、桑折の家で暮らしていたんだ。前ほどではないにしろ、決して不自由なものではなかったよ。何よりも、

母がよく笑っていたからな、あの頃は……。だがそれも長くは続かず、私は嶋原シマハラの家に引き取られることになった。皮肉なことに、その日も雪が降る冬の日のことだったな。……それから私は嶋原家の人間として医師を目指すことになる。嶋原の家に入った時には既にミツコさんは他所に嫁がれていたし、在原家との関係は破綻に近い状態だった。理由は……知らなかったが、正直私はそれよりも、自分が嶋原家に認められることに躍起になっていて、在原家のことを気に掛ける余裕はなかった。その後君の兄たちと再会し、幼少の思い出を甦らせ、今に至る」

紗霧は薄く口許に笑みを浮かべて、雅史を見る。その視線は普段とは異なり、どこか哀切にも似た雰囲気を漂わせ、鋭さよりも柔らかさを感じさせる。

雅史は、何か口にしようと思ったが、声にはならず唇だけが微かに震えただけだった。

「……やはり、血縁者なだけある」

ふと、紗霧が雅史の頬に触れて呟いた。

「君の眼は、ミヤビさんによく似ている。淡い色の虹彩も、優しい眼差しも……」

これ程の至近距離から紗霧に見つめられるのは初めてで、雅史は驚きを隠せなかったが、紗霧の視線が自分を通して別の人物に向けられているものと分かると、気恥ずかしさよりもその人物に対する微かな羨望さえ覚えた。

自分の叔母に当たる人物であり、志雅や雅恭にも慕われ、そして紗霧にとって特別な存在である、ミヤビという名の女性。会ってみたいと思う反面、自分に似ていると言われ、どこか親しみを感じる。しかし雅史の胸の中には、小さな不安も芽生えていた。それは自分が心から尊敬する兄・志雅も、紗霧と同じ気持ちで自分を見ていたのではないかという途方も無い考えだった。

雅史自身、何故そのような考えが浮かんだのか解らず、不思議に感じていた。

「…すまない。昔の話をしていたせいか、君がミヤビさんに見えてしまう。会えないと理解しているのに……」

「どうして、会えないのですか？」

雅史の掠れた声が口から零れると、紗霧は反対に驚いた表情を見せた。

「聞いてないのか？ ミヤビさんは既に亡くなっている」

何と無く予想をしていたことであつたせいか、雅史はあまり驚いた表情を見せなかった。否、実際は表情を大きく変えられるほどの力が、雅史には無かつたのである。感情の起伏も、まるで薄く、ぼんやりとしているように見える。そのため紗霧には、雅史がミヤビのことを知らなかつたことよりも、雅史の体調の方に関心が向いていた。

「大丈夫か？ 具合が悪いのなら、今日はこの辺で」

「待つて下さい」

紗霧が話を止めて腰を浮かす。すると雅史は、その腕を掴み引き止めた。

正確には、紗霧が体温を測ろうと伸ばした手に、雅史の手が触れた程度なのだが、雅史の必至の様に、紗霧は再び椅子に腰掛ける。それを見止めた雅史は、小さく息を吐いて頬を緩ませた。

「まだ、大丈夫ですから……。もう少し、聞かせて下さい」

「君がそう言うのなら……」

触れた掌から感じた体温に、僅かに眉根を寄せながらも、紗霧は雅史の言うことを聞いた。それは、今までには見せなかつた、雅史を甘やかす一面だ。

雅史は弱く微笑みを返し、感謝の言葉を口にする。しかしそれも蚊の飛ぶような小さな声で、紗霧は益々不安を募らせていく。初めて雅史を診た時でさえ、これほど脆弱な様子ではなかつた。だからこそ、できるだけ長く雅史の様子を見ようと、この場に残ったのかも知れない。

その時ふと、雅恭が言った言葉が脳裏に浮かび、紗霧は言葉に含

まれた真意をようやく理解した。「雅史の様子がおかしい」この言葉は間違いない、病的な理由を指すものではなかったのだ。雅史の体調の変化が、身体を蝕む何か、雅恭にはおぼろげにでも見えていたのだろう。だからこそ、自分に診察を依頼してきたのだ。

唐突に、紗霧は雅史の身体を診る使命感のようなものを覚えた。

「で、何が聞きたいんだ？」

なるべく不自然にならぬよう努めながら、紗霧は雅史の手首に手を伸ばす。

脈はまだ、正常な範囲だ。

「…僕の、叔母に当たる方の話を…。どのような方だったのか、もう少し聞かせて下さい」

「ミヤビさんのことは、私よりも君の兄上たちに聞いた方が正確だと思うが…。私の見解でも構わないか？」

コクリと、雅史は頷きを返す。

「そうだな…。外見は、先にも言ったが、君に似ている。眼差しが特に。何年も前の記憶であるから信用に欠くと思うが、それでもミヤビさんは美しい人だった。いつも笑顔を絶やさず、柔らかな印象を持っていた。それによくぼんやりとしている人で、一緒に走り回っていたというよりも、私たちが遊んでいるのを側で見ていることが多かった。そしてとても思慮深い人で、言葉も優しく、周囲の人からも大変慕われていた。いつだったか、私たちが座敷で遊んでいたときに、不注意から花器を割ってしまったことがあったんだが、その時ミヤビさんは、私たちを頭から叱ることなどせず、理由を聞いてくれた。そのお蔭で厳しく叱られることもなく済んだ。先代御当主を始め、家人の方達は皆ミヤビさんには弱くてね。使用人の中にも、ミヤビさんに助けられた者は多かったと聞いた。それだけ、聡明な人物でもあったということなんだろう」

雅史は紗霧の語る雅という女性を脳裏で想像する。そして聞けば聞くほど、実際の叔母に会いたいと思ひ、同時に残念だと思ふ。

もしこの場に叔母が居たならば、自分にどんな言葉を告げたたる

う。どんな風に、今の在原家を思うことだろう。そう考えるたびに、雅への想いは膨らんでいった。

雅史が雅へ想いを馳せているとき、紗霧は雅史の表面上の容態を診察していた。顔色を始め、脈拍や体温、眼の充血などを見ながら、紗霧は雅史の体調変化の理由を探り続けた。しかし、次第に瞼を閉じている間隔が長くなり、雅史の意識が朦朧とし始めたことに気が付き、一層頭を悩ませる。その様子が、まるで強い睡魔に襲われているかのように見えたからだ。これでは病気というより、睡眠薬の服用による症状のようにも見える。

「大丈夫か…？」

気になって声を掛けてみると、雅史は瞼を閉じたまま、小さく唇を動かす。

「…僕も、お会い、したかった…」

消え入るように呟かれたその言葉は、ほとんど寝言に近い状態で、そのまま雅史は眠りに着いてしまった。この様子は、幼子がお話の途中で眠ってしまうのと大差無い。

「…雅史君…？」

もう一度声を掛けてみたものの、やはり返されるのは静かな寝息であった。

雅史の異変を目の当たりにした紗霧は、雅史の話し相手となることを理由に、屋敷に留まることを申し出た。それには当主も靦面に顔色を変えたが、医者としての仕事は一切しないという条件で、渋々紗霧の逗留を承諾したのだった。

その時紗霧は、当主が出した診察時の立会いをしないという文句に引つ掛かりを感じて、月村の診察を覗くことを決意する。何か当主にとって隠したいこと、疚しい事があると感じたからだ。これは医者としてというよりも、女の勘に近いものだった。

しかし周雅たちの力を借り、上手く雅史の部屋の窓まで辿り着いた頃には、既に月村の診察は終わっており、衿を直す雅史に説明をしている頃合だった。

「経過は悪くありません。まだ暫くは、自宅での養生が必要ですが、直ぐに良くなるでしょう」

月村医師は医療器具を片付けながら、静かに話した。

「…薬の量も、減らしておきます」

不意に言われて、雅史は少し眉を上げる。何故、自分にそんなことを言うのか、分からなかったからだ。薬はいつもサヤが運んでくれているし、そもそも薬自体を雅史が手にするのは服用直前だけなのである。

視線が月村とぶつかると、小さな笑みを返された。まるで心の内の疑問を全て見透かされた気分になって、訊ねるところか、その予想に反発したい気分になった雅史は、直ぐに顔を逸らして着衣を整えると、椅子から立ち上がるうとする。

確かに、食後や就寝前に飲む薬の量が以前に増して多く、雅史は気分が悪かった。もとより薬物の類に対して抵抗を持っていた雅史にとって、毎食後の薬の量が増えたことは拷問に近く、正直言つと

月村の言葉は嬉しいものがあつた。

勿論、処方に対して嫌な顔を見せたつもりはなかつたが、どうやら月村には分かつていたようだ。自分の内側を覗かれた気分がして、雅史の心は複雑な心境に在つた。

「今日の診察はこれで終わりです。どうぞ、お休み下さい」

いつものように、盆に用意されていた水と薬包を出され、雅史は黙つて手を伸ばす。薬を飲み終わると、雅史は椅子に深く腰掛けた。雅史は静かに目を閉じる。導かれるように、引き込まれるように身を委ねていく。段々と月村の声が志雅のものに聞こえ優しい気持ちになる。

雅史の意識は遂に手放された。

力の抜けた雅史の体を受け止めた月村は、慣れた様子で雅史を布団に寝かしつけ、部屋を後にする。

その一部始終を窓の外で窺っていた紗霧は、扉と鍵が掛けられても、暫くその場を動けずに居た。

音のみで判断した室内の様子から導き出した答えの信憑性を考え、紗霧は志雅にどう伝えるべきか悩む。雅恭たち兄弟はこのことを知っているのだろうか。そして何よりも、月村がこのような行動を取る理由に、紗霧は考えを巡らせていく。

窓の外で紗霧が頭を悩ませている頃、雅史は夢の中で、兄や若葉、そして想像の叔母と共に時間を過ごしていた。

陽だまりの中、あまりにも柔らかな空気に包まれていて宙に漂う雲にでもなつた気分である。

しかし一筋の光が天を走り、一瞬にしてその場を黒雲に覆われる。激しい雨が降り頻り、傍に居た兄たちの姿を溶かして行く。雅史は急いで手を伸ばしたが、その手は届くことなく、兄たちの姿は消えてしまう。次第に雨は赤味を帯びて足元に広がつた。

哀しみと恐ろしさに声も出せない中で、叫びたい気持ちから雅史

は飛び起きた。夢であったことにほつとしながら、手に残る生々しい感触に震えた。頬を伝う涙を拭いもせず、雅史は弱弱しい足取りで机に向かう。そして引き出しから組紐の鍵を取り出し、胸の前で握り締めた。

せめて母さんだけは、助け出さなければ……。

「こつちです。さ、早く」

雅史は若葉の手を取り、牢の扉から彼女を出した。

蔵から出ると、雅史は真っ直ぐに裏口を目指す。そしてなるべく早急に、屋敷の敷地から出ようと考えていた。家の者達が寝静まるのを待ったが、夜の見回りがある。それに見つかっては元も子もない。第一、雅史には先の一件で監視の目が強くなっている。部屋に居ないことが知れるのも時間の問題だろう。追っ手が来る前に、せめて身を隠せる裏山に入りたいと雅史は思っていた。

夜道に光は無く、小さな懐中電灯の明かりだけを頼りに、雅史は走り続ける。決して、若葉の腕を離すことはなく、時折振り返りながら夜道を突き進む。雑草の生い茂るその道は、雅史の腕を、脚を、頬を、まるで引き止めるかのように触れては傷を付ける。時には、足元に伸びた木の根や枯葉、湿った土が、雅史の行く手を阻むかのように足を取る。それでも、胸の痛みと朦朧とする意識を叱咤しながら、雅史はただただ走り続けたのであった。

暫く獣道を走った雅史と若葉が行き着いた先は、小さな山小屋であつた。

入り口に鍵は掛かっておらず、長い間使われていない様子である。小屋の中は埃とカビ臭さを含んだ空気が漂い、天井や隅には蜘蛛の巣が掛かっている。それでも外で一夜明かすよりは、ずっと安全な筈だ。幸いにも、今夜はそれ程寒くはなく、火を起こさずとも過ごせる。雅史は夜着の上に羽織っていた着物を脱ぐと、若葉に歩み寄



った。

「母さんは、此処に居て下さい。外の様子は、僕が見ていますから」  
ぼんやりと格子戸の外を見上げている若葉に声を掛け、雅史は入り口の戸に手を伸ばした。返事を聞けるなどとは思っても居なかったが、それでも実際にこのような対応を受けると、寂しさが胸を駆け抜ける。以前のように接してくれとは言わないけれど、それでも平生の姿に戻って欲しいと、願わずには居られなかった。

木戸を閉め、外壁伝いに腰を下ろすと、雅史は空を見上げる。今宵の月は既に西へ沈み掛け、星の瞬きだけが見える。しかしそれも木々に囲われた限りある一面だけで、雅史の周りには闇に近い暗がりであった。

虫の声も、風の音も聞こえない深い深い静寂。

ふと、自分の首筋に手を伸ばすと、指先から脈動が伝わり雅史の脳裏に先日的一件が呼び起こされる。

徐々に失われて行く音。それに伴い大きくなって行く自らの鼓動。酸素を渴望する全身の叫びと、薄れて行く意識。体中の細胞が活動を止め、眠り始める気配に漂いながら、ただ首筋から伝わってくる若葉の体温を感じていた。今でも思い出せる。直前に見た瞳が、ひどく優しくかったのを。

閉じた瞼の向こうで、若葉がどのような表情を見せていたのか、雅史は知らない。自分の頬に零された一滴の涙。その冷たさだけが、今の雅史を支えていた。

「…母さん…」

膝を抱えて、雅史は応えの無い言葉を呟く。それは夜風に流され、木々のざわめきに掻き消される。後には虫の音だけが響いている。

雅史は知らぬ内に、袖口を濡らしていた。

いつの間にかまどろんでいた。

何処からか人の声が聞こえ、雅史は顔を上げる。周囲を見回しな

がら耳を欬てる。そして小屋を振り返ると雅史は急いで中に居る若葉の元へ走り寄った。

若葉は土間の辺りで横になっていたが、雅史が声を掛けるとゆっくりと身を起こした。しかしその腕を引き上げる前に、雅史の耳には自分達を捜す声が入り、雅史は独りで小屋の外に向かった。自分の耳が確かならば、捜す者達の中に兄が居る。兄たちなら、自分の話を聞いてくれるかも知れない。そうすれば、若葉だけでも逃がすことが出来るかも知れない。たとえ見つかったても、自分だけならばまだ若葉を逃がす方法はある。雅史は思い切って木戸を開けた。

しかし運悪く、雅史が声のする方へ向かおうとした直後、その背に声が掛けられた。振り返ると其処には、家人を連れた家令の姿が在った。

「お捜し致しましたよ。御館様も心配なさっております。さ、我々と一緒にお戻り頂きましょう」

相変わらず感情の窺えない声音で家令が言うと、控えていた家人達が雅史の腕を掴む。元より逃げる気はなかった雅史だが、彼が相手では話を聞いて貰うことは不可能だ。

それならば自分が囷となつてこの場から離れた方が賢明だろう。彼は必ず自分を追う筈であるから。

雅史は隙を見て再び走り始めた。

そして案の定、家令は雅史を捕まえるために家人達に追わせる。

だがその一方で、後から来た者たちに小屋を捜すように命じていた。

「止めて下さいっ！」

雅史は掴まれた腕を振り払うのを止めて、小屋に向かう男達に向かって叫んだ。必死に声を張り上げるが、まるで聞く様子を見せない男達に、雅史は絶望を感じる。

それでも何度も何度も、雅史は制止の声を上げ続けた。

このまま喉が潰れても構わないと思いつながら、何度も、何度も。

そんな雅史の眼の前に、若葉が姿を見せた。手を縛られ、両脇を

家の者達に抑えられながら、若葉は小屋から静かに出て来たのである。抵抗する素振りも見せず、相変わらずぼんやりとしているように雅史の眼には映った。

しかし、連れ出されて近付いて来た若葉と目が合った瞬間、雅史はその眼が正気であることに気付く。

真つ直ぐと自分に注がれる視線は以前のような優しいものではなかったが、確かに若葉は正気の様子で家人達に捕らえられていた。

「…母さん…？」

「…いくら月の明かりがあるとしても、夜の散歩は感心できませんわ。雅史さん」

につこりと微笑まれ、まるで全ての音を奪われたように、雅史の耳には若葉の声しか響かなかった。

「所詮、子供のお遊びでしょう」

全身を氷柱で射抜かれた気分だった。何を言われたのか直ぐには理解できず、呆然とするばかりだ。

ようやく理解できると、雅史は耳の奥でこだまする若葉の声に、言葉に、まるで吸い取られてしまったかの様に体中の力が抜けていくのを感じ、そして地面に崩れた。

「…僕は、何に縋って生きて行けば良いのですか…」

凍てつく寒さが冷えた床から足元を伝って全身に広がる。心の臓を捕らえるかのような氷の檻は、蛇の牙が直ぐそこまで迫っていることを知らせているようだ。

かつてこの間に居た人物は、一体何を思っていたのだろう。蔵の壊れた本鍵の代わりに、扉に下げられた南京錠が内側から掛けられているのは何故か。外界と繋がる唯一の扉に掛けられた鍵もそうだ。そして扉から一番離れた隅の壁面に刻まれた、幾筋もの線は何を意味するのか。小さな格子窓から差し込む陽光も届かぬその一角で、何を考えていたのだろうか。

かじかむ指先を握り締めながら、若葉は額に拳を当てた。

母さん、これを……。

優しい声と自分とそう変わらない 否、自分よりも細く儂げな白い手から渡されたそれは、家人に連れ戻された今でも若葉の手の中にある。ふたつの鍵。梅の花と鶴の姿が彫られた真鍮の鍵は、間違いない無く、眼前に立ちほだかる檻から自分を出してくれるものだ。

「……どうしたらいいの……」

白い息と共に吐き出された言葉は、微かに震えていた。

そこへ、蔵の扉が開かれ階下から人の上ってくる足音が聞こえた。軋む音を立てて近付いてくるほの明かりに目を向けて、若葉は手元の鍵を帯の内に隠す。

初めは逆光で相手の顔は判らなかったが、格子の向こうに立ち、足元に明かりを置いた手で鍵を開けようとした時、ようやくその人物が誰であるか若葉にも見えた。

「お話しがあるのなら、このままで話して頂戴。雅恭さん」

その声に鍵を開けようとしていた手を止めると、雅恭は下ろしていた前髪を煩そうに掻き揚げ、口許に薄い笑みを浮かべた。

「お元氣そうで安心しました」

「ええ、ちゃんとお食事も運んで頂いているわ」

「そうですか…。少々お聞きしたいことがあります、訪ねさせて頂きました」

「お父様には内緒で？ ならば秘密のお話しかしら」

若葉はいつも通りのにこやかな声を意識して応える。しかし雅恭にその態度は通じなかった。

「流石、そちらの手管も素晴らしいものをお持ちのようだ」

含みのある雅恭の言葉を受け、若葉はキツと睨み据えた。

「…裕福な暮らしだけでは、物足りませんか？」

「何ですって？」

「あなたは望み通り、父との結婚で明日の心配などせずに済む暮らしを手に入れた。それでもまだ、足りないのか・と聞いているんです。所詮、金に目が眩んだ結婚だ」

「そうでなくては、誰がこんな家に来るといふのっ!？」

若葉は顔を歪め、憎悪の灯った瞳を向けた。

「誰が、自分よりも遥かに歳のいった男の、しかも自分より年上の子供が居る家なんかの後妻としてくるというのよっ。財産目当て？」

当然じゃない！この若さと美貌を持ちながら、どうして愛やなんかでこんな家に入ると思ふのよっ」

「……開き直り、ですか」

「あら、当然のことを当然と言っているだけよ。今更、お綺麗な正論なんかを突き付けられたって、私は痛くも痒くもないわ」

「それは一向に構いませんが、誰彼構わず足を開くのは見逃せませんね」

「ふんっ。そんなこと言っただって、男は皆同じじゃない。考えていることは変わらないわ。あなただってそんなことを言っているから、あの人の子供なんだから、どうせ」

「確かに、俺もあの男の血を引いている。否定はしません。…ただ、安心しました。そこまでご理解いただけるのでしたら、これから起きることも理解していただけるでしょう」

雅恭の顔に悪辣な笑みが浮かべられた。

「あの男と同じに捉えられるのは心外ですが、この際そんなことはどうでも良い。あなたを消してでも、俺は雅史を救わなければならぬ」

「な　っ！」

驚愕に眼を見開き、瞬時に浮かんだ恐怖に顔を青ざめる。若葉はすぐさま壁際に後じさり、雅恭を見返した。

「…ここまでとは知らなかったわ…血は争えないわね」

また父親と重ねられ、雅恭は不愉快そうに目を細める。若葉は胸元で握り締めた指先に力を入れて続けた。

「それから、例えば私が消えたところで、あの人は決してアノ子を手放したりなんかしないわよ」

含みのある言い方で、若葉は格子を挟んでこちらを見据える雅恭に言った。

「御長男の言葉でも絶対にアノ子を外になんか出さないわ。許す筈が無いもの」

「どういう意味ですか？」

「ふふ…。頭が良い貴方達でも、解らないことがあるのね。お父様の姿を見ていて何も気付かなかったの、雅恭さん？」

「親父の行動だと…？　親父は、雅史の身体を心配し過ぎている面はあるが、それ以外は…」

「カラダねえ…。確かにアノ子の身体を気に掛けているのは本当でしょうね。母親の二の舞いになってしまわないように、それはそれは大切に育ててこられたようだから」

「雅史の母親を知っているのか!？」

雅恭は若葉の口から出た言葉に、食い付くようにして格子に手を掛ける。その様子に若葉は一瞬だけ、眉を上げて驚いた表情を見せたが、直ぐに変わらぬ笑みを浮かべた。

「やっぱり、聞かされていないのね…可哀相に…」

「知っているのなら教える。…それが条件だと言うのなら、場合に

よつては呑んでも構わない」

「あら、そんなに躍起になることかしら。貴方の兄上は御存知のことなのに」

「兄貴が？」

「ええ。だからあの人は、御長男の勘当を認められたのよ。でなければ、家督を継ぐ人物をそう簡単に家から出すなんてありえないでしょう。何よりも、正式に在原家の嫁として認められていたのは、御長男の母君だけなのですもの」

「…なんで、そんなことまで…」

「当然でしょ。結婚相手の素性は隈なく調べさせて貰ったわ。例え、金銭私欲のための婚姻であつたとしてもね」

若葉は雅恭から視線を外し、息を吐く。

「…やはりあの時、逃がしてあげれば良かった…」

風に紛れてしまふほどの小さな声で、若葉は呟いた。

意味が解らず雅恭が聞き返そうとしたところへ、慌しい足音を立てながら、雅匡が息を切らして入ってきた。

「兄貴っ、雅史の様子が…！」

「どうかしたのか？」

「今は周雅兄が付いてるけど、とにかく様子がおかしいんだ。直ぐに来てくれ」

「おかしい？ ……医者に連絡は？」

「今連絡させている。だけど、アイツが出て行った時から、雅史の様子がおかしかったらしいんだよ」

「どういうことだ？」

「とにかく、直ぐに来てくれっ」

雅匡に引かれて牢を出る時、不意に背後で笑い声が聞こえた。それは先頃の若葉の笑い声に似ていた。

く鏡匣ノ節く (二)

二度にわたる雅史の脱走は、そのどちらも成果を見せなかったとは言え、少なくとも雅史の身体が正常範囲であることを雅恭はじめ兄弟たちに示していた。

けれども若葉を連れ出し、家令達に連れ戻されて帰って来た雅史の様子は、明らかに変容を見せていた。虚ろな眸と力の無い動き。兄たちの声に、家人の制止が無くとも雅史は答えられる状態では無いように見受けられ、三人の兄たちは困惑した。

実際、例の如く窓を伝つて部屋を訪ねた雅恭は、応答することも出来ずにただひたすら隅の方で身体を丸めている雅史の姿を目撃している。

雅史の身に、何が起きたのか。

それを訊ねることに加え、悩みの種である若葉を雅史から完全に離すことで、事態の解決を図ろうと雅恭は提案し行動に移った。

筈だった。

しかし、雅史のことを考えるのならば、先ず月村医師の対処を考へるべきであったと気付いたのは、雅匡マサタダから雅史の急変を受けた道中でのこのだ。

現段階で雅史に一番近付ける人物を、自分も周雅も警戒していた筈の者を失念していた。

たとえ先に文で伝えていたとしても、正気ではない雅史に拒否する意思表示などできたかは不明だが、それでも、紗霧が屋敷内に居ることで、自分に油断があったことは確かだった。

己を叱責しながら、雅恭は急ぎ雅史の居る離れに向かった。

「 雅恭っ 」

途中の廊下で、騒ぎを聞き付けたのか、紗霧が雅恭に駆け寄ってきた。



何かを話したがっている様子だが、雅恭はそれを抑えて先を急ぐ。「悪いが話は後にしてくれ」

「雅恭、行きながらで構わないから聞いて欲しい。今連絡が入ったんだが、在原が」

並び歩きながら、紗霧は用件を口にす。

しかし伝えようとしていた内容は、雅恭が雅史の部屋の入り口をあけたことで、映像として目に飛び込んだ。

「兄貴…っ!？」

驚愕に目を見開く雅恭の口を衝いた言葉は、屋敷に居る筈の無い人物を呼ぶものだった。

「久し振りだな、雅恭」

「ど、どうして此処に兄貴が…？」

「雅史のことが気になってな。…少し、遅かったようだが」

今は静かに寝息を立てている弟の額に伸ばしていた手を離し、声を低めて答えると、再び戸口に佇む雅恭に視線を戻して立ち上がる。

「お前たちにも話しておくことがある。部屋を変えよう」

「話して…。それよりも、雅史は大丈夫なのか？」

「色々とあつて疲れているようだ。少し休ませてやれ」

戸に手を掛け、もう一度室内を振り返り戸を閉めると、眠る雅史を一人残して母屋に向かう。

その背に否応無く引かれて、雅恭をはじめその場にいた者たちは離れから出た。

渡り廊下を抜けた先にある、庭に面した座敷に着くと、初めに口を開いたのは雅恭であった。

「兄貴、話っているのは一体…。それに、どうして家に？」

「話というのは雅史のことだ。だから家に来た」

「雅史のこと？ 何か、重い病気でも見付かったのか？」

「……。身体のことか理由というのは、間違っではないか」

「他にもあるのか？ はつきり言ってくれよ、兄貴」

「随分と、弟思いの兄になつたな、雅恭」

「はぐらかさないでくれっ！」

雅恭とは裏腹に長兄・志雅ユキナリは静かに淡々と答えを口にする。その様子に雅恭が声を上げると、それを宥めるように雅匡が間に入った。「雅恭兄、そう声を荒げなくても……。志雅兄が折角こうして帰って来てくれたんだから」

「それは違う、雅匡。志兄は帰ってきた訳じゃない……」

兄弟の中で最初に志雅と会っていた周雅チカマサが、言い難そうに力無い声で弟の言葉を否定した。それに驚いた表情を見せたのは意外にも雅匡ただ一人である。

雅恭は舌打ちが零れそうな表情で、兄を見上げる。

「また、何処かへ行くのか……。別に兄貴の行動に口出す気は無いが、騒ぎが収まるまで暫く家に居てくれないか。親父には俺から話をするから」

「お家騒動の收拾くらい一人で出来ないか？」

「そういうことじゃないっ。雅史の身体が危ないことを紗霧から聞いていないのか？ たとえ気まぐれで来たとしても、雅史を見て何も思わなかったのかよっ！」

溜息混じりで返された言葉に、雅恭は眼前に立っていた兄の胸ぐらを掴み、再び声を上げる。

「あんなに痩せて、食事も薬も安心して口に出来ないんだぞ。それに、気まで狂ってしまったらしいじゃないか……。そんな雅史のことさえ、もっとうでも良いのかよっ！？」

「……………」

「何とか言えよっ！ それとも自分の捨てた家のことだから関心も無いか？」

「確かに、家のことに興味は無い。だが、雅史のことを投げたつもりは無い」

「だったら何故、雅史にあんな物を渡したっ！？」

「あんな物……？」

「奥屋敷の蔵の鍵だ。あれさえ無ければ、雅史だってあんな行動に

は出なかつた筈だ」

「誰か蔵を使っているのか？ …… そういえば、あの女の姿が見えないな…。今蔵に居るのはあの女か、雅匡？」

「あ、ああ…。若葉さんが蔵に居る」

「そうか。あの女のことだ、自分から、という訳じゃ無いだろう。… 雅史との一件で押し込められたか…」

思案気に眉を顰めて呟きながら、志雅は蔵の在る奥屋敷の方へと視線を向けた。

「そうだ。親父はあの人から雅史を離すことで、事態を收拾しようとした。けど雅史は蔵の鍵を使ってあの人と逃げようとしたんだよ…。そのために山狩りまでした…っ」

「山狩り…？ そんな蛮行にまで及んだのか…あの狸が」

「親父は、雅史があゝの鍵を使ったことに大層驚いていたよ。まさか雅史が持っているなんて、思ってもいなかったんだろう。だから、立ち入り禁止の蔵にしたんだろうからな」

雅恭は額に手を当てて俯き加減に目元を隠し、唇を噛み締めた。

口にしたことで、どれだけ理不尽なことを兄にぶつけているか、少なからず分かった。

自分でも、八つ当たりであることが解る。

けれどもこの苛立ちはどうすれば収まるのか、そして自分は一体どうすれば良いのか分からず、眩暈さえ覚えた。

自分の育った家だというのに、何が起ころうとしているのか見えない。

「 雅恭、お前の言いたいことは解った。だが、考えを変える気は無い」

はつきりとした声が頭上から響き、雅恭は顔を上げる。そこには既に自分から視線を外した兄の姿だけがあった。

「雅史を連れて行く」

「兄貴！？」

「此処に居て、雅史が幸せになれるとは思えない」

「でも、親父が許すと思うのか、志兄」

「そうだ、周雅の言う通りだ。親父に何て言う気だよ？」

「断りは入れる」

「待て、在原」

襖に手を掛けた志雅を止めたのは、それまで黙っていた紗霧であった。紗霧には、今現在の雅史の状態を見て考えるところがあった。

「何故、家から出す必要がある。それに、身体のことも」

「身体の方は心配無いだろう。万一何かあっても、俺が診る」

「だからと言って、何も家から出すことは無いだろう」

紗霧の言葉を受けた志雅は、何か気付いた様子で襖から手を離し、紗霧に向き直る。

「…君が聞きたいのは、雅史がああなった理由か？」

志雅の核心を得た問いに、今度は紗霧が動きを止める。顎を引き、自分に向けられる感情の窺えない瞳を見返すが言葉は出ない。志雅にかかれば、さしもの紗霧も見透かされる側になるのである。我が兄ながら、考えは勿論のことその内面は未だに読めないと、雅恭は思う。

「…そんなに知りたければ君の妹にでも聞けば良い。俺の口からは、雅史の為にも言うことはできない」

「サヤが？」

志雅の言葉に、一同の視線が部屋の隅で正座していた紗霧の義妹・サヤに向けられる。

サヤは雅史の世話役でもあり、確かに今も食事などを運び雅史の部屋に入ること許されている。何かを見ていたとしても、不思議は無い。

「わ、私は……」

「サヤ。雅史のことで何かを知っているのなら、教えてくれ」

明らかに動揺した様子を見せるサヤに、雅恭が歩み寄る。

「私は、何も……」

「サヤ、本当に何も知らないのか？」

詰め寄る雅恭から逃れるように身を引いて、首を左右に振るサヤに紗霧が訊ねる。芯のある強い声音に、サヤは泣き出しそうに眉根を寄せる。顔を背け、壁際に追い詰められながらも、サヤは口を嚙み続けようとしたりした。しかし、震えながら唇を噛み締めるその姿こそが、何かを知っているのだと物語っていた。

雅史の精神を狂わせたのは何か。それが判れば、志雅を止めることもできる。雅恭はそう考えていた。

「サヤ」

再び名を呼ばれ、顔を上げると自分を見つめてくる義姉の眼とぶつかった。これまで一度たりとも見たことの無い、姉の瞳である。眼鏡の奥から、自分に注がれる一筋の光。鋭くも穏やかさを潜めた眼。その真つ直ぐな視線が、サヤの良心に触れた。

「…お、御館様が…」

小さな声で、サヤは呟くように口を割った。

「…私に、仰られたのです。雅史様を、私に下さると…」

「雅史を…？ サヤ、まさかお前」

「私はっ！ 決して明かすつもりはございませんでした！」

サヤは顔を振り上げ、紗霧の言葉を否定する。

「胸の内に仕舞い、主従以外の想いなど見せぬように、これまでも、そしてこれからもお世話をしていく所存でございました。…ですが…ですが御館様の御言葉に、私の心はいとも容易く崩れてしまったのでございます」

はらはらと、サヤの眦から涙が零れる。溢れる想いに言葉が誘われたのか、それとも涙に言葉が引き出されたのか、サヤは話を続けた。

「…雅史様の御側に、この私が居られるようにして下さいと、御館様は仰せになりました」

「…ですが御館様。雅史様は奥様を…」

サヤは申し難そうに言葉を濁し、主人の答えを待った。雅史の心に存在する想い人を、サヤも知っていたのである。そしてそのために、雅史が自室に臥せっていることも。

今とて、雅史の食事や薬から身の回りのことを済ませて来たばかりだ。雅史の様子は、よく分かつている。しかしそんなサヤの心配を他所に、主人は柔らかな微笑を見せた。

「あれは、単なる気の迷いに他ならん。若さ故のな……」  
紫煙を吐きながら、主人は言葉を口にした。

「雅史も直ぐに気付くであろう。その気も無く、人の心を惑わすことほど罪なものはない。雅史の為にも、このことが本心ではないことを、理解してやってくれぬか、サヤ」

とても深い、慈愛に満ちた眼差しで、雅史の居る離れを見遣るその姿に、サヤは静かに頷きを返す。

「お前なら、解つてくれると思っていた。雅史は今回のことで、心労から再び身体を患ってしまったているが、お前が側に居れば大丈夫であろう。これからも雅史を頼むぞ、サヤ」

開け放たれた障子戸の向こう 離れを望みながら主人はもう一度笑んでみせる。そしてゆっくりと、口を動かした。

「サヤ、これから雅史の身の回りはお前に任せる。それで、ひとつ頼みがあるのだが、この薬を毎晩の食事に混ぜて、持って行って欲しい」

袖口から薬包を取り出し、主人はサヤの手元に置いた。

「実は、どうやら雅史はこの薬が苦手らしくてな……。処方されても飲まずに医者先生を困らせているらしい。だが無理に与えるというの今は酷なことだ。聞けばこの程度なら、食事に混ぜれば薬の味も分からないということだ。どうだろう。頼めないか、サヤ？」  
「かしこまりました、御館様。私も、雅史様には一日も早く良くなつていただきたいと思っております」

「そうか、良かった。 サヤ、できれば内密に頼む」

「御館様はそう仰せになられて、その薬を私に御渡しになられました。…それから毎晩、雅史様のお食事に混ぜて御膳を運びました。私は、雅史様のそのようなお姿を人に漏らすことはできないと思ひ、薬はいつも胸に隠し持つておりました」

サヤの雅史を想う気持ちが無くとも、事は成されていただろう。もとよりサヤは雇われの身。それも単なる使用人ではなく、半ば人質と呼ぶような身上であった。それ故、主人の言葉に逆らうことなど到底無理な話であり、頭からサヤを非難することはできない。雅恭にも当然理解できていたからこそ、遣る瀬無い気持ちに拍車が掛かる。

「それで、一体何があった…？」

「…お医者先生の先生がお帰りになられた後、雅史様がお休みになつておられた所へ、御館様が部屋に来られました。雅史様のご様子をお尋ねになられたので、今はお休みになられていると申し上げました。そうしたら、此処はもう良いから、自分も休むようにと仰せになられたので、部屋を出ました。…それから少しして、雅史様のお部屋に置き忘れてしまった物に気付き、私は来た廊下を急いで戻り、離れに向かいました。…そうしたら…、そこで…」

「何があった？ お前は何を見たのだ？」

言い淀み、言葉を詰めるサヤの様子に、雅恭が詰め寄る。

「…そ、そこで私は…見て、しまったのです…御館様が、雅史様に…雅史様のお体に…」

そこまで口にして、サヤは目にした光景を思い出したのだろう。

その先を、嗚咽で言葉にできなくなった。涙も止め処無く流れ、倒れこむようにして畳に手を着く。小刻みに震えるサヤの背中に、紗霧が手を伸ばした。その一点から広がる温もりに、サヤはまたも涙を溢れさせた。

二人の姿からこれ以上は望めないと思つたのか、雅恭は今聞いた話から推測できたことを確かめるため、部屋を出ようとした。

気付けば兄の姿も無い。

もしや既に父の元へ向かったのだろうか。

ならば自分も急がなければならぬ。

父の言葉で、志雅が考えを変えることなどあり得ないと、雅恭は知っている。

今ここで、自分が出たとしても、変えることはできないかもしれない。

しかしそれを指を啜えて見送れるほど、雅恭も子どもではなかった。



く鏡匣ノ節く (終節)

雅恭は兄・志雅ユキナリが部屋を出たのを追うように、外廊下に出た。

するとそこへ、慌しく廊下を駆ける数名の足音と、喚き散らすような怒声とが飛び込んできた。

騒ぎに気付いた周雅と雅匡も廊下に出て、声の聞こえてきた方向かへと、離れへ続く渡り廊下の辺りで声の主を見つけることが出来た。父と、そして志雅である。

「ミヤビは渡さん！」

ただならぬ様子で発せられた言葉に、雅恭は異様さを覚える。

今、父親は何と言ったのか。叫びに近い声音で響き渡った声は、何と言ったのか。矛先は分かる。間違い無く、廊下を突き進む志雅に向けられたものだ。内容も大体は納得できる。けれど理解するには疑問が残る。何故【ミヤビ】なのか。

必至の形相でこちらへ向かって来る当主を、志雅は一瞥しただけで直ぐまた廊下を進む。

「何をしておる、奴を止めぬかつ！」

激昂して叫ぶ当主に、家人たちは戸惑いながらも志雅を止めに掛かる。

そして行く手を阻むように家人らに立ちはだかれた志雅は、眉を顰めながらその場に立ち止まった。

家人たちを払い退けることも可能だったが、この先 雅史の部屋にまで押し掛けられては面倒だと踏んだのだろう。だが、決して意志が変わった訳ではない。

その証拠に、父や雅恭の前に振り向いた志雅の表情は、こちらの様子に厭き厭きとしたものだった。

「痴れ者が！ 貴様なんぞにミヤビを渡すものか。さっさと屋敷か

ら出て行けっ！」

顔を赤らめ憤然として当主が言い放つが、志雅はそれを聞き流した。

あまりに冷静な様子の兄に、雅恭は畏れにも似た感情を抱く。姿は実兄でも、自分の知らない人物が、其処には立っているようだ。「言われなくとも、直ぐに出て行きます。雅史を連れて」

「何だどっ！ 貴様にそのようなことを許した覚えは無いっ。私の許し無く、勝手をするなっ！！」

「許しなど必要ないでしょう。貴方は既に、人として過ちを犯している。父親でも何でも無い」

息子の声が、影が、かつての男の姿に重なった。

異様な寒気が全身に広がり、目の前の光景が過日のそれに溶け込む。視線を一点に集中させている当主の身体は、小刻みに震えていた。

「…貴方は人として過ちを犯した。もう兄では無い…」

「雅史のことに口出しする権利など、貴方には一切無い」

「…ミヤビさんを引き止める権利など、貴方には無い…」

激しい声で突きつけられた言葉が、耳の奥でこだまする。全身の血液が沸騰しそうな勢いで駆け巡り、強く荒々しい感情が胸の内でも混ざり合う。どろどろとした得体の知れぬ何かが、自分を飲み込むかのように侵していく。息が荒くなり、酷い頭痛がする。

そして当主の身は、過去のある日へと遡って行く 否、寸でのところで、その身は現実に引き止められた。

「…兄…さん？」

突如響いた声は、弱々しく鳥の羽音よりも小さなものであったが、当主の耳には一本の矢の如く、その耳に届いた。父の視線に倣い離れに目を向けると、戸を開いた横で、冷えた廊下に素足で立っているその姿に雅恭は息を呑む。

背格好や身に着けているもの、そして遠目ながらその顔立ちは、見慣れた弟に変わりはない。ただ一点を抜かせば、それは紛れも無く雅史である。

「兄さん……」

「どうした？」

「……万華鏡が……無いんだ……。兄さんのくれた万華鏡が……」

歩み寄る志雅の腕に手を伸ばし、心細そうに答える声もまた、雅史のもの。

「っ！」

雅恭の横で、息を吸い込むような声にならない音が聞こえた。

それは遅れて来た紗霧が、今日の前に広がる光景に吃驚したものであった。

「あれは……誰だ……？」

「雅史だ……。さつき気付かなかったのか？」

独り言のような紗霧の問いに答えたのは、隣に佇んでいた周雅である。

周雅は雅史から視線を逸らしている雅匡を一瞥し、二人に聞こえる程度の声で続けた。

「俺と雅匡が部屋に入ったとき、雅史は頭から毛布を被って蹲っていた。声を掛けたら強い力で腕を振り払われたよ……。ああいう姿を、半狂乱って言うんだろうな……。泣き叫ぶように声を上げて、まるで髪を掻き毟るように顔を上げたとき、既に雅史の髪は白くなっていた」  
哀切の色とも呼べない深い色合いが周雅の瞳には浮かんでいた。

「一体あれは、どういうことだっ!?!？」

母屋の一室に戻り、自分の目にした事実を信じられない雅恭は、壁を叩きながら声を上げた。

「何故あんな姿に…っ！ それに、親父はなんで雅史をミヤビと呼んだんだっ！？」

「後者になら、答えられる。雅恭、これを見てくれ」

続いて入って来た紗霧が、手にしていた書類を傍らの卓の上に広げた。

「ここに書かれているのは真実だが、私が話すのは憶測も入っている。だが、確信のあることだと承知してくれて構わない。当主が口にした【ミヤビ】というのは、きつと君達の叔母であるミヤビさんのことだろう。そしてこれはあくまで私の推理だが、雅史君の母親は、ミヤビさんではないのか……」

「な…っ！？」

途方の無い紗霧の考えに、雅恭は言葉を失う。だが、それに一理あると思えるのも事実。雅史の姿に叔母・雅の面影を見たことのあるのは紗霧だけではない。

「二十年近く前、ミヤビさんはこの家から姿を消している。そのとき手を貸した人物は、シマバラ フミツグ。私の叔父に当たるその男性の名は、こう書く」

卓上の調書を数枚捲り、紗霧は紙面上に書かれたその人物の名を指で示した。

「… 嶋原、史嗣…」

雅恭は突きつけられた真実に、眩暈を覚えた。

自分達の名は、それぞれ父と母の名を一字ずつ受け継ぐという在原家のしきたりに倣って付けられたものだ。他家に嫁いだとしても、それが残ることは考えられる。ならば紗霧の言っていることも、あながち嘘とは言えない。現に、調書には嶋原 史嗣と婚姻関係を結んだ女性の名は、在原 雅となっている。

「 嶋原。随分とこの家のことを探っていたようだが、欲しかった情報は得られたのか？」

不意に襖が開かれ、静かな声が響いた。見れば外套を片手にした志雅の姿が目に入る。

冷徹なほどの視線で、志雅は紗霧を見た。表情は無いに等しく、よもや表面上での質問に過ぎない。そんなことに、本心では興味が無いと志雅の態度が言っている。

紗霧はその視線に言葉を返せず、立ち尽くしていた。

すると紗霧の横から、雅恭が兄を引き止める。

「待ってくれ、兄貴」

「雅恭……。いつまでもこつちに居て良いのか？ まだ学業が残っている筈だろう」

「兄貴、知っているなら教えてくれ。雅史は本当は」

「お前が何を聞かされたか知らないが、雅史は俺たちの弟だ。それを否定したいのならそれでも構わない。だがそれなら雅史のことに口出しするな」

「在原、少しはこつちの話も……」

「これは兄弟のことだ。君には関係ない」

「いいや、関係はある。私を雅史君の主治医に推したのは貴方だ。

それに雅史君が雅さんの」

「黙れっ！」

ピシヤリと言い放たれ、紗霧は口を噤む。兄のあまりの様子に、続いて入ってきた周雅も驚きを隠せない。

「それが真実であるという証拠は何処にも無い。百歩譲って、君の考えが真実であったとして、それが何だと言うんだ。雅史の現状を変えられるものかと言えるのか？」

「だが、雅史君の母親が雅さんだと言うのなら、雅史はこの家に居るべきだ。雅史君には正当な在原家の血が流れているのだから」

「だからそれが何だと言うんだ？ この家に残ったところで、跡継ぎには雅恭が居る。周雅、雅匡も後継者として申し分ないだろう。雅史を残す理由にはならない」

「しかし雅さんの遺児であるなら私は恩返しをしたい」

「ふ…っ。その程度の理由か。結局君は、雅史を身代わりとしてしか見ていないのだろうか？ 雅史自身のことを思っていることではないのなら、黙っている」

「在原…っ」

志雅から鋭い視線を向けられるが、紗霧はなおも食い下がった。ここで止めてしまったなら、この先に進むことができなくなることを、紗霧には分かっていた。

雅史を連れて行くという志雅の言葉は、必ず実行される。それを考え直させるためにはもつと言葉を交わさなければならぬ。雅史のことを思っているのは、紗霧とて同じだ。紗霧は志雅から視線を外さずに、言葉を探し続ける。

これまでの紗霧なら、志雅の行動を横目に自分のことだけを考えていただろう。しかし、雅史がミヤビの子であるかもしれないという考えから、紗霧は何もせず雅史を見送ることはできなかった。それは、志雅の言う雅への恩義からかも知れないし、中途半端に患者を手放したくないという医師としての気持ちからかもしれない。どちらにせよ、紗霧は雅史をこの屋敷から出さたくないという意見で、志雅とは対立していた。

紗霧と同様に雅史を残したいと考えている雅恭は、何も言わずに二人の遣り取りを見ていた。だがその胸の内では、何故兄・志雅が雅史を連れて行くことに拘こたわっているのか、その疑問の答えを兄の姿から導き出そうと思案していた。

この時部屋の片隅で佇んでいた周雅は、自分の知らない話を基に話している三人を不思議な気分で見つめていた。そんな周雅こそが、一番冷静な視点から事態を考えているとは、志雅も考えてはいなかった。そして同じように所在無さ気に室内の様子を眺めていた雅匡もまた、どうして兄たちが言い合っているのか、理解できないと言った様子を見せていた。

雅恭と紗霧が志雅の行動を止めようとしていることは、話の様子から解る。けれど何故二人がそう考えているのか、不思議にも思う。

むしろ反対する理由の方が聞きたい。

周雅は再び熱を帯び始めた三人の様子に、無駄かも知れないと頭の片隅で思いつつ、自分の考えを口にする。

「俺は、志兄が雅史を連れて行くことに反対しない」

唐突に発せられた周雅の言葉に、驚いた雅恭と紗霧が振り返り何やら言おうと唇を振るわせる。それを溜息を一つ吐いて受け流し、周雅は続けた。

「あの状態の雅史を、この家で世話し続けることは不可能だ。それに二人には悪いが、この家で四六時中雅史を見続けることが可能な人物を考えれば、俺は志兄に頼むことを選ぶ」

「そうだな…。俺も周雅兄と同じ考えだ」

「雅匡まで何を言うんだ。お前たち、雅史のことが心配じゃないのか？」

「俺から言わせて貰うと、雅恭兄の方がどうかしているよ。雅史のことを考えたら、この家に居ることの方が辛い筈だ。俺たちが居ない時間の方が多いつてことを、分かっているだろ？ 大体、雅史の様子を見れば、誰と一緒に暮らす方が良いのか一目瞭然だろ」

雅匡の言葉に、雅恭は言い出しかけた言葉を飲み込む。

確かに、先の一件の様子を考えれば、雅史にとって誰と居ることが一番良いのか、簡単に解る。あのとき雅史は、他の誰にも目をくれず、ただ一人の人物にのみ答えていた。

だがしかし、割り切れない気持ちがあるのも確かだ。

二人の弟たちから宥められるのがまさか自分の方であるとは思っていなかったが、それでも冷静に雅史のことを考えていくと、自分の意志が弱まるのを感じる。雅史を手放すようなことはしたくないと思いつつも、それでも雅史の様子が脳裏に浮かぶ度気持ちが揺らぐ。それが解ることが、雅恭にとっては苦しかった。

隣に立っている紗霧もまた、同じ心境のようだ。

先程までの追及する強い光がその眼からは消え、戸惑いにも似た色が浮かび秀麗な眉を困惑に歪めている。もしかすると、こちらの

考えの方が間違っているのかも知れない。

雅恭は気持ちを整えるように長く息を吐き、静かな声で志雅に向かった。

「…兄貴、少し考えさせてくれないか…」

短時間の内に色々とあり過ぎて、雅恭の頭は朦朧としていた。上手く考えをまとめることの出来る時間が欲しい。

「せめて今夜一晚、考えさせてくれ…頼む」

雅恭はそう言うのが精一杯で、その後兄が何と答えたのかよく聞き取れなかった。

それから数分後、雅史は白い手に円筒状の包みを抱いて、車に乗せられていた。

夜風が寒くないようにと、その身には大きな外套衣を羽織らされてはいたが、中は夜着に裸足のままである。けれども雅史の頬は何処か嬉しそうに紅潮し、手にした包みを愛おしそうに抱き続けている。そして無論、手も足も汚れてなどいなかった。

夜の闇の中を静かに走り出した車内で、雅史はふと窓の外に視線を向ける。

見えるのは深い漆黒。

志雅の腕に抱かれながら、雅史はぼんやりと視線を空に漂わせ、夢見心地で呟いた。

「…兄さん…。雷ソラが、見たい」



く鏡匣ノ節く (終節) (後書き)

物語はここで一先ず幕となります。

後日譚、別視点でのものを、機会があれば随時載せて行きたいと思  
います。

ここまで、ありがとうございました。

く彩組ノ節く (前) (前書き)

本編よりも数年ほど遡ります。

幼い雅史の視点で、【謎】の一部を垣間見てください。

く彩組ノ節く (前)

僕の妹は、母さんと一緒に別のお家に居た。

歳は僕の一つ下で、名前はミノリ。一番上の兄さんから聞いた物語のお姫様のように長い髪をしていて、二番目の兄さんに見せてもらった絵の女性のように白い肌をして、三番目の兄さんと見たお人形のようなだ。四番目の兄さんに教えてもらった言葉を使うなら、ミノリはとても可愛い。

会ったことは少ないけれど、ミノリはいつも笑っていて、僕のことを「タダシちゃん」と小鳥のような声で呼ぶんだ。

その声を聞くと、兄というよりも友達のような気分になって呼び方なんてどうでも良くなる。

本当に可愛い、たったひとりの、僕の妹。

そして今日は、ミノリに会える日だ。

何を持って行こうか。庭のお花かな。でもミノリの居るお部屋からはお庭の花壇が見えて、きっと今は此のお家よりもたくさん花が植わっている筈。

なら、やっぱりお菓子かな。だけとお菓子は、母さんたちに持つて行くって言うていた。

じゃあ、ミノリには何が良いだろう。

僕はミノリへのお土産を考えながら、机や本棚の辺りをこそごとそと漁っていた。

すると引き出しの中で指先に何か固い物が触れた。取り出してみるとそれは、万華鏡だった。

僕は中を覗いて、筒を回す。くるくると変わると変わる光景に、夢中になって筒を回す。こんなに小さなものなのに、中はどこまでも広く見える。それがとても面白い。色硝子が動いて、たくさん形の成す

のもすごく綺麗で、初めて見たときは不思議でたまらなかった。どんなに見ていても、飽きることはなくて、ずっと万華鏡を回していた僕に一番上の兄さんが買ってくれたのがこの万華鏡だ。

そうだ。この万華鏡を見せてあげよう。

ミノリは前に綺麗なものが好きだって言っていた。だからきつとこれも気に入ってくれる。…頂戴って言われると少し困るけど、でも、ミノリになら良いかな…。

僕は兄さんたちと一緒に、ミノリの居るお家に向かった。

まずは母さんにごあいさつをして、お茶を頂いた。それから直ぐに、太陽の光が差し込む廊下を抜けて、屋敷の南西に位置する部屋へ向かう。ミノリの待つ、寝室に。

「…タダシちゃん…？」

部屋の扉を叩いてから中に入ると、寝台の上から人形のようなまあるい目が、僕の方へ向けられる。大きな窓からの日差しに照らされて、ミノリはにっこりと微笑んだ。

「来てくれたのね、タダシちゃん」

寝台に近付くと、ミノリはその小さな白い両手を僕へと伸ばした。触れるとちよつと冷たい、ミノリの手。これは薬のせいだって、僕は知っている。

ミノリは、僕がお家から出られない理由と同じ理由で、このお家に居るのだと、父さんが話していた。

それに、僕を診てくれているお医者先生の先生が、ミノリのことも診ているのだと兄さんが教えてくれた。

だからきつと、この冷たい掌や顔色が悪いのは薬のせいだ。元気なミノリなら絶対に兄さん達のような温かい手をしているはずだ。

「どうしたの？」

「ううん、何でもないよ。そうだ、ミノリに見せたいものがあるんだ。手を出して」

僕は持っていた包みを差し出されたミノリの手において、紐を解く。鈴の付いた組紐を外すと、ミノリが声を上げた。

「まあ、綺麗」

「見た目も綺麗だけど、ここから覗いてみて、ミノリ」

布を取り払って円筒を見易いように置き換える。するとミノリはちよつと戸惑いながらも、目を近付けて筒の中を覗き込んだ。

「…キラキラしていて、すごく綺麗。これはなあに？」

「万華鏡って言うんだ。筒を回すとね、もつと綺麗だよ」

僕が言うと、ミノリは小さな手の中で万華鏡を回した。

「あ、模様が変わったわ。雪の結晶みたい…とっても綺麗」

楽しそうな声を上げながら、ミノリは次々に変わる光の花を見続けた。

喜んでもらえたみたいで、本当に良かった。

「見せてくれてどうもありがとう、タダシちゃん」

「ううん。気に入ってもらえて僕も嬉しいよ」

「またこっちに来たら、見せてね」

「うん。必ず」

「ありがとう。約束よ」

ミノリはそう言つて、僕が帰るときに万華鏡を返した。

一緒に摘んできた花が花瓶に生けてあるから、それでいいとミノリは言つたけれど、本当はもつと万華鏡を見たかつたかもしれない。

でも、何も言わなかつたのにミノリは手の中の万華鏡を返して、また見せて・とだけ言つた。

ミノリには言葉にしなくても、僕の気持ちが伝わってしまったのだろうか。

ゴメンね、ミノリ。

く彩組ノ節く (後)

次にミノリと会えることになったのは、肌寒くなった冬の或る日のことだった。

そしてそれは、ミノリのお見舞いではなくて、母さんのお見舞いに行くためのものだった。

母さんは、ミノリと一緒に暮らしているけど僕の母さんではない。そのせいか、僕が【母さん】と呼ぶことを嫌っている。

一番上の兄さんは名前で呼ぶし、他の兄さんたちとは普通にお話しをしているから、きつと僕に理由があるのだと思う。何かはわからないけれど。

そして今日も僕は初めに「あいさつだけをして、ミノリの部屋へ向かった。

「タダシちゃん」

扉を開けると変わらない笑顔が僕を迎えてくれる。

可愛い僕の妹。

今日は窓辺の椅子に座って本を読んでいたみたいだ。

「どうしたの？ 一緒にお話ししましょ」

入り口から動かない僕に、ミノリは小首を傾げて言う。小鳥のさえずりよりも鈴の音よりも愛らしくて、耳に心地よく響く声。なんだかとっても、温かくなった。

それから僕はミノリとお話しをして、一緒にお菓子を食べた。甘いお菓子がいつもよりずっと甘く感じた。

それから少しして、ミノリが思い出したように言った。

「お人形の箱が無いわ… …タダシちゃん、きつと母様のお部屋だと思ふの。取って来てもらえないかしら」

「うん、いいよ。どんな箱？」

「時絵の…黒い箱よ。紅い組紐が付いているわ」

「わかった。じゃあちよつと、行ってくるね」

「ありがとう、タダシちゃん」

僕はミノリのためにできることがあって、ちよつと嬉しくなりながら部屋を出る。

母さんの部屋に一人で行くのは少し勇気が必要だったけど、大丈夫だと心で唱えながら向かった。

母さんの部屋に行くと、用の済んだお手伝いさんが出てくるので、僕は用件を話して入ることを許してもらった。中には母さんだけが、具合が悪そうに臥せている。

昼間でも薄暗い室内はどこかひんやりとしていて、僕は早く箱を見つけて出ようと思う。

何か黒い大きなものが、その辺から手を伸ばしてきそうで、どきどきする。

そして室内を見回すと、嬉しいことに肝心の箱は直ぐに見つかった。

「…誰…？ 其処にいるのは、誰…？」

箱を手にした時、突然声を掛けられて僕は思わず立ち止まってしまった。

「…あなた…。どうしてあなたが此処に居るの」

「ご、ごめんなさい。この箱を頼まれて…」

「また、私の邪魔をしに来たのね…っ」

母さんはゆっくりと身を起こすと側まで来て、僕の腕を掴んだ。冷たい指先の爪が食い込んで、とても痛い。

「私を笑っているの？ こんな姿になった私をっ！」

「い、痛いよ、母さん…っ」

「解るのよ、私には。どんなに隠したって！」

一層強く握り締められて、僕はどうしていいかわからずにただ立

ち尽くしていた。

「…ミノリを連れて行く気なのね。あなたにとって邪魔ですものね、あの子は…。だけど、あなたになど渡さないわ。あの子は私の子ですもの。絶対に渡さないわ、ミヤビ!」

突然呼ばれた名前は、僕の知らないものだった。

「あの子を…たとえもう、先が望めないとしても、ミヤビ、あなたにだけは渡さないわっ!」

母さんの叫ぶ姿が怖くなって、僕は力いっぱい腕を振り払うと部屋から飛び出した。

まるで般若面のような形相で、必死になって僕の腕を握り締めていた母さん。

だけど母さんの眼には、僕では無い違う誰かが見えていたようだった。だって、顔を歪めて口に使っていた名は、僕のものじゃなかったから。

きっと他の誰かの姿に見えていたのだと思う。そうじゃなかったら、僕に母さんがあんなことを言うはずが無い。

僕は箱を抱えながら、ミノリの部屋に走り戻った。

部屋に着いてミノリの顔を見ると何だかとても安心した。

だけど同時に、母さんの言葉も思い出してしまった。

もう先が望めない。

あの言葉はミノリのことだろう。

そう考えるとミノリの顔を見ることが出来なくなった。

「どうしたの?」

「別に、何も……」

「誤魔化しては駄目よ。私の体のこと?」

ミノリは覗きこむように首を傾げて、僕の顔を見た。

まるいその眸に、僕の困惑した顔が浮かんでいる。

「そんな深刻そうな顔をしては駄目よ。幸せが逃げちゃう」



「ミノリ……」

僕に伸ばされた手を握り締めて、僕は妹の名を呼んだ。

「どうしたの？」

「……ミノリが消えてしまいそうで、不安なんだ」

正直な気持ちをお口にすると、優しい小さな笑い声が聞こえて、そつと手を握り返された。

「タダシちゃん……。私は消えないよ。今度はアナタの中で、生きるんだもの」

ミノリの声はとても静かで、顔はいつものように笑っていたけどとても冷たい。握られた手も、ちよつと痛い。

「此の体が要らなくなつて燃やされた後、私は其の体で生きるの。今まで離れていた分、父様や兄様たちとお話をして、一緒に暮らすの。だから今度は、タダシちゃんがお屋敷に閉じ込められる番よ」

「……それは、どういうこと？」

「まだ、わからないかな……。でも、直ぐにわかるよ」

またにつこりと笑つて、ミノリは僕の手を放した。まだじんわりと痛い。手首のあたりを見ると、少し赤くなっている。冷たい指先で触れるとそこから熱が感じられた。

なんだかいつものミノリじゃないみたい。すごく、怖い。まるであの時の母さんみたいだ。僕を【ミヤビ】と呼んだあの時の、母さんみたい。

僕の身体が震えだしそうになる頃、不意に僕を探す声が聞こえた。

「兄様が呼んでいるわ、タダシちゃん」

「あ、もう帰る時間かな……」

僕は立ち上がつて、廊下から聞こえる兄さんの呼ぶ声に応えた。そしてミノリにまたねつて声を掛けて、扉を開く。

「」

何か、ミノリが言ったような気がしたけれど、気のせいだったみ

たいだ。いつものようにミノリは笑って手を振っている。それに手を振り返すけど、いつもとはなんだか違う感じがする。

だけど、扉は閉まってしまい、廊下に居た兄さんに手を引かれて、僕は屋敷を出る。

玄関を出た時、伸びた影を見てふと顔を上げると、端の部屋の窓辺にミノリが見えた。きつと、またいつものように笑っている筈だ。僕の、たったひとりの妹のミノリは、そうして見送ってくれていたんだから。

夕刻の赤い空には三日月が浮かんで、わらうように僕を見下ろしていた。

「アナタの体は、もうすぐ私のもの」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7372w/>

---

吟於霄

2011年9月30日03時16分発行